青山同窓会会報

《 発行所 》
青 山 同 窓 会
〒951 新潟市関屋下川原町2-635
新潟県立新潟高等学校内
TEL 025－266－5268
FAX 025－266－5268
《 編集、発行人 》
上 村 光 司
《 印刷所 》
オリオン印刷 ㈱
〒950 新潟市南出来島1-19-1
TEL 025－283－2151
FAX 025－283－3804

ごあいさつ

青山同窓会会長
37回 鈴木正二

明けましておめでとうございます。

会員の皆様には昨年は大変お世話になりました。お蔭様で母校創立百周年行事も盛大にとり行うことができました。予定された記念事業もそれぞれ滞りなく終了し、青陵特集号を残すのみとなりました。これも皆、会員各位の母校に対する温かいお心の賜と重ねて厚く御礼を申し上げます。直接いろいろお世話いただいた各期幹事の皆さんのご苦労には全く頭の下がる思いであります。ありがとうございました。

次なる節目に向かって新たな第一歩を踏み出しました新潟高等学校並びに青山同窓会に対しまして、今後とも引き続きご支援、ご協力を賜りますようお願い致します。

新しい年を迎えられた会員各位におかれましては、ますますのご発展とご健康、そして同窓会の更なる発展を祈念いたし、新年のごあいさつと致します。

青山同窓会総会

本年度の総会は、例年七月に行われていたものを、百周年記念式典と時を同じくして、十月十七日、記念祝賀会と併催された懇親会に先立ち、ホテル新潟で行われました。議事進行も大変スムーズに、予算・決算が承認され、多数の出席者の拍手のうちに終了しました。

平成四年度 東京青山同窓会総会開催

昨年七月十四日、母校創立百周年を記念し、「環日本海経済圏と新潟の将来」をテーマに、山城NKK会長をはじめ、同窓有力パネリストによるパネルディスカッションを好評裡に終えたが、平成四年度の総会は、十二月一日、大手町のサンケイホールで開催された。

新潟本部の協力と若手幹事の努力により、名簿の整備が進んだことで、これまでにない二二〇名を超える参加となった。加えて、新潟から、瀧澤校長、関根、栃倉先生、同窓会会長代理の早福氏、赤羽幹事長はじめ、九名の方がたの参加を頂き、嬉しい限りであった。

総会は、斎藤伸雄会長の挨拶に続いて、幹事長の前年度会務報告、事務局長の新年度事業計画、予算案、役員選任も全員の諒承を得て、スムーズに進行した。

続く懇親会は、石塚事務局長の手なれた司会で進められ、早福氏から鄭重な祝辞を頂き、斎藤英四郎名誉会長から「新潟弁など気にせず、豊かな心と大いなる人となる気概で活躍して欲しい」と励ましのお言葉を頂戴した。

待ちかねた乾杯は、最長老の32回曽我、35回山名両氏の発声により、幕が開かれた。

昨年に続き、網笠、浴衣姿の出で立ちよろしく、安田信託連中の「佐渡おけさ」「炭坑節」で宴が盛り上がり、更には、会員から寄せられた多数の商品が「ウルトラジャンケン」によって、歓声のうちに配布されて行った。

宴酣となるや、「玲瓏の天」が56回の三崎氏、「百里流れて」は84回の星野氏のリードによる斉唱がホール一杯に響き渡った。あとは、老若入り乱れての応援歌合戦をやりながら幕を閉じた次第である。

（55回阿尻記）

「新たな世紀に向けて」

学校長　瀧澤　強一

平成四年十月十七日、新潟高等学校百周年記念式典が新潟市体育館でとり行われ、盛大裡に無事終了いたしました。全同窓会諸氏にまずこのことを御報告申し上げます。

当日はまさに快晴、身の引き緊まるような爽涼の大気に日の光普く溢れる中、厚地県知事職務代理者殿、長谷川市長殿、両先輩を特別来賓に迎え、多くの来賓、全生徒、同窓多数、PTA会員等々の参列を得て、式は粛々と遂行されました。式後、斎藤英四郎経団連名誉会長殿からは「所感――昔、今、これから」、永井梓読売新聞論説委員殿からは「行くてはるけき」とそれぞれ題して御講演をいただきましたが、いずれも日本を導く方々で、しかもお二人とも本校先輩であるだけに、生徒の受けた感銘もまた格別のものがありました。かく振り返ってみますと、何といっても本校が培った人脈の輝きのすばらしさがあらためて知られるのであります。

学校である以上、その目的の真髄は真に秀れた人間を育くむことでありましょう。百年の伝統を受け、新たなる世紀に向けて第一歩を踏み出すに当たって、私どもは気持も新たに生徒の育成に最大の力をつくし、本校の未来が一層の輝きを増すよう努める覚悟であります。今、世界も日本の教育も大きな変動の期にありますが、わが新潟高校はその中にあっても悠々真理を学び、同時に過去の財産を未来に生かし新しい時代を切り開いていくことのできる人間の揺籃の地としたいと願っております。

さて、本校の次なる課題は校舎改築であります。県下最初の鉄筋校舎も地震等もあってかなり老朽化しております。以前から県に改築にかかわる陳情を行ってきましたが、このたび知事が代わったことでもあり、昨年末平山新知事に鈴木同窓会会長を先頭にあらためて陳情してまいりました。そう簡単なことではないでしょうが、新しい時代にふさわしい教育の場としての校舎実現を願って今後も努力を続けるつもりであります。

最後に、百周年記念事業にあたって同窓の方々には募金をはじめさまざまな面で多大な御協力、御支援をいただきましたことにあらためて心から感謝申し上げる次第であります。

百周年について

実行委員会　総務
59回　関根　彰信

一点の雲もない青空、十月の穏やかな太陽の光、まさに世紀の祭典に相応わしい佳き日でありました。

記念式典は市体育館において、厳粛に執り行われました。参列した全校生徒、同窓生、保護者、旧職員、現職員あわせて2400余人は、咳きの音一つ聞こえぬ式場に響く朗々たる式辞の声に、ひときわ百年の重みを感じさせられたのであります。

次いで記念講演会が行われました。豪州での日豪経済界会議々長の任を翌18日に控えて、なおかつ是の日のために御来駕くださった経団連名誉会長の齋藤英四郎先輩（36期）は、切々と明治人の気骨を力説されました。読賣新聞論説委員の永井梓先輩（62期）は、軽妙な語り口で、在校生の前進を温かく激励されました。

ホテル新潟の祝賀会場では、大ホールの廊下まで溢れて立錐の余地もなく参会なさった1200余人が、限りなき祝意を沸騰させ、校歌、応援歌のフィナーレに酔い痴れました。

百周年のプロジェクトが緒に就いたのは、鈴木昭二校長の昭和61年度でありました。これを受けて、宮地正禎校長のもとに昭和62年6月26日に校内の準備委員会が発足しました。次いで同窓会、PTA、学校の代表による準備委員会が鈴木正二同窓会長をキャップとして、昭和63年10月17日に第一回の会合を持ちました。こうして式典、講演会、祝賀会、音楽会、文化祭などの諸行事、募金、施設充実、記念品、百年史、同窓会名簿などの諸事業の立案が進められました。早速着手したのは百年史の資料収集で、これがことのほか難事業でありました。また百周年を期しての校舎改築の陳情も行われました。回顧録の発刊も追加されました。

これらのプログラムに立って百周年記念実行委員会がスタートしたのは平成2年5月23日のことであります。

かくして平成3年を迎え、瀧澤強一校長のもとに、着々と準備は進みました。最も大切な募金運動も予想をうわまわるご応募を頂きました。また百年史の執筆も進みました。記念品のテレホンカードは金山常吉先輩（60期）のデザインと決まりました。記念の文鎮作製も追加され、シンボルマークと共に上村長生教諭のアイデアが決まりました。生徒・同窓職員有志の斉唱で校歌・応援歌のテープもできました。施設関係の一部変更で、クラブ活動基金の設立も認められました。

このようにしてN響団友による素晴らしい記念音楽会と記念文化祭を先き駆けとして、ついに平成4年10月17日を迎えたのであります。

百周年関係の諸連絡が不徹底で、大変ご不満の方々も多かったと思います。心からお詫び申し上げる次第であります。しかしそのご不満さえも、母校にお寄せ下さる熱い思いであると有難く受けとらせて頂いております。

この世紀の祭典が、かくも大成功でありましたことは、ご欠席の方々をも含めまして、全同窓生、PTA、職員の一致団結した心の絆の賜物とお互い喜びあいたいと思っております。

新潟高等学校は、これより第二世紀に一歩を踏み出します。学習面での向上、規律の高揚、スポーツの振興等々の

目指すところはさらに高く、到るべき理想はなお遠いものがあります。新潟高等学校に学ぶ〝つわもの〟どもが、皆この道をまっしぐらに進み行くであろう事を固く信ずるものであります。

長嶋茂雄風に言うならば、〝青山精神は不滅です〟。

同窓各位のご清栄と、なお一層のご助力とご鞭撻を祈念し、あわせてプロジェクトなかばに逝かれた片山真教諭（66期）のご冥福を祈りながら御礼といたします。［完］

東京青山同窓会
母校創立百周年記念パネルディスカッション

前事務局長
72回　渡辺　毅之

母校創立百周年を記念し、昨年七月十四日午後六時より、日本橋の東洋経済ホールにおいて、パネルディスカッションを開催しました。

パネリストに、同窓の山城彬成氏（47回・NKK《旧日本鋼管》会長）、倉茂周明氏（55回・大成建設㈱代表取締役副社長・前住宅都市整備公団副総裁）、栗林貞一氏（59回・日本航空㈱代表取締役専務・前海上保安庁長官）、高橋進氏（60回・住宅金融公奉総裁・前建設省事務次官）、長谷川義明氏（61回・新潟市長）の五氏をお迎えし、小池義之氏（66回・東洋経済新報社論説委員室長）の司会により、「環日本海経済圏と新潟の将来」と言うテーマで、各氏より、専門的知識と経験を

百周年式典当日は、雲一つない秋晴れ。参列される方にとっても、準備する側にとっても何よりの天からの贈り物。思わず天に感謝したい気分。式典の時刻が近づくにつれて、いやが上にも気持が高揚する。続々と参列者ご到着。久し振りにお目にかかる方、名前は知っていても顔を未だ拝見していない方、よく結婚式がそうであるように、百周年がみんなに会わせてくれて、まぶしいばかりの陽の中、市体育館前あちこちで挨拶が交わされる。

▼立食形式の祝賀会。立錐の余地もない程、大勢の人が出席しての大振わい。いつまでも母校にまつわる昔話に花を咲かせている。主役は百歳の新潟高校。この日は、折りにふれては、言うに言われぬ青山の百年の重みが伝わってくる感動の一日である。

▼机上に「青山百年史」と「青山同窓会会員名簿」二冊。歴史と名前が、それぞれ青山の百年を語ってくれる。時として互いに関わり、デュエットを奏でてくれる。埋もれていたこと、忘れかけていたこと、なつかしき人、世話になった人などなど、今ここに甦る。百年間にもわたる事実を探ったり、確認したりの作業。関係者のご努力のおかげで、この二冊のタイムマシンに乗って青山の過去に旅することができる。

▼式典後素晴らしい講演をされた斎藤英四郎氏から昨年の

年頭随想
二百周年に向けて

校内幹事
69回　栃倉　浩

東京青山同窓会総会で、再び先見性に富んだよいお話をうかがった。

▼「一七八九年、自由、平等、博愛を旗印にフランスは革命を成功させた。その百年後の一八八九年に、自由の本家であるフランスがアメリカにあの〝自由の女神〟を贈った。さらに百年後の一九八九年には、明石と淡路島に橋を架ける計画が立てられたが、それと同時にフランスと共同して日仏友好モニュメントとして巨大な青銅板をその橋に溶接する計画が進んでいる。（斎藤氏はモニュメント設置委員会の会長）その板に刻まれるテーマは、コミュニケーションである。過去百年間、科学技術は目を見張るものがあったが、もし国家間にもっとコミュニケーションがなされていたならば、世界大戦や幾多の戦争は避けられていたに違いない。ディスクロージャー（心を打ち明けて意思疎通をはかること）がもっとなされていたならば、あのような悲劇を味わわなくてもよかったはずだ。これからはコミュニケーションを大切にして、人間の幸せを求めて行かねばならないと思う。」

▼百周年という節目を迎えた今、青山百年間の喜怒哀楽の声を耳にすることができる。幾多の艱難辛苦の声も聞こえてくる。それにもかかわらず叡智をもって雄々しく前進して来た。温故知新、先人に学びながら再び新たな節目に向かって歩み出そう。そして斎藤氏が言ってられる百年刻みで願いを込めてきたように、これからは社会も個人もコミュニケーションを保ち、諍いや戦争の悲劇を繰り返さない日々を迎えたいものだ。そういう平和の中で、二〇九二年、よく晴れた感動の二百周年式典の日を後輩の人たちが迎えることを願っている。

生かした提言を行って頂きました。

開会の冒頭、会長の斉藤伸雄氏（44回・和光証券㈱相談役）より挨拶があり、パネリストの皆さんへの謝辞と、提言への期待が述べられました。次いで、幹事長の阿尻威吾氏（55回・安田信託銀行元専務取締役）により、各パネリストの紹介がなされました。

最初に、前日ハルビンから帰国したばかりの長谷川市長が、環日本海経済圏における新潟の役割と対応、そのためのインフラ（社会的基盤）の整備と文化育成の必要性等の基調報告をしていただきました。

これに関し、山城氏は、新潟は対岸諸国との玄関口になるべきで、単なる通過点であってはならず、豊かな水と勤勉な労働力を生かして、シベリア等対岸地域の開発への多大な貢献が期待されると述べられました。

次いで、倉茂氏は、資源開発と労働力利用を目的とした新都市を、ロシア極東部に建設すべきで、そのためにも、新潟において、港湾等のインフラ整備が不可欠であると提言されました。

次に、栗林氏は、新潟を拠点としたモスクワ、ヨーロッパ便の建設のためには三千米級の空港が是非必要であり、将来、新幹線・高速道の空港への乗り入れも考慮されるべきであると述べられました。

又、高橋氏は、鉄道や下水道、公園等のインフラ整備と、多様性のある住宅都市作りの必要性を述べられました。

我が国の第一線で活躍されている各パネリストの皆さんから、同窓生ならではの、ふるさとへの暖かい提言がなされ、長谷川市長から感謝の言葉が述べられました。

パネルディスカッション終了後、パネリストの皆さんを囲んで懇親会が開かれ、来賓として新潟から駆けつけられた、赤羽幹事長、瀧澤校長先生、さらには、新潟市の石崎企画財政局長（64回）、長井総合調整課長（71回）、広橋同課長補佐（74回）、小原企画課長（75回）等の皆さんが紹介され、一七〇名をこえる参加者を交えて、盛大なうちに会を終えました。

百周年記念祝賀会について

69回　敦井　榮一

昨年四月の同窓会役員会で、石田前実行委員長の後任として、同窓会懇親会実行委員長の大役を仰せつかり、ほんの少しばかり同窓会や母校のためにお役に立てばという軽い気持でお引受けさせていただきました。ところが奇しくも、今度は母校創立百周年記念祝賀会と合わせて行うということで、例年催される懇親会と規模や性格の点で大いに異なることを知り、「さて困ったぞ……」と思ったことでした。迷いながらも一つ一つ手をつけて行くことにしました。先ず先輩や若手の同窓の方々に実行委員をお願いし、全員の方より快諾をいただきました。その後分担を決めさせていただき、ようやく組織作りが出来た時にはなんとなくほっとしました。

どんな料理が良いか、来賓の方々の誘導はどうするか、司会進行役としての段取りなど、考えなければならない問題は沢山ありましたが、特に頭を悩ませたのは、祝賀会の前に結婚式が入っていて、短時間の内に、いかに大勢の参会者の受付をスムーズに行うかということでした。祝賀会出席者へ送付済の受領書と入場用の名札を式典受付の際に交換しておくこと、式典の行われた体育館からの輸送バスに時差をつけることにより混雑を避けること等を学校側と協議決定し、ご担当の先生方の協力と秋晴れの天気のお陰で、予想以上に上手く行ったと思います。

さて予定時刻五時三十分に、百周年実行委員会総務部上杉部長の開会宣言に始まり、鈴木会長、滝沢校長から御挨拶をいただき、長谷川市長、本間県教育長より御祝辞を頂戴しました。皆さんから新潟高校の過去の活躍や次なる百年に向けての大いなる期待と激励の言葉を頂戴し、感激しました。乾杯の音頭は上原PTA会長にお願いし、その後新潟古町のお姉さん方と振袖さんによる新潟のおどりがあり懇親会が始まりました。立食形式にもかかわらず、参会者の方々が最後まで大いに歓談を尽くされている姿を見て、皆さんが百周年という節目に当り、学生時代を思い出されながら、心から喜んでおられるのだと思いました。最後に校歌斉唱（ピアノ伴奏63回江口さん、指揮70回大塚君）、上村副会長による万才三唱、そして実行委員会総務部関根副部長による閉会宣言と、どこからともなく始まった「青山アオヤマあおやま……」の大合唱の中で大盛会裡に終ることが出来ました。

何かの縁で二度と出来ない母校百周年の祝賀会の進行役をさせていただきました。今思うと、『マー何とかなったかな』と考えています。これも偏に、大所高所から助言とご指導をいただいた同窓会幹部の方々、暖かくかつ精力的にご協力いただいた副委員長を初め実行委員の皆さん、それから、長期に渡り大変な努力をしていただいた先生方、そして何よりも懇親会にご参加いただいた同窓の方に心より感謝申し上げます。

百周年募金へのご協力ありがとうございました

おかげ様で、募金目標額（同窓会分三千万円）をはるかに超える約三千八百万円のご寄付を同窓各位から寄せていただきました。皆様からのご芳志は、別途会計収支報告書でお知らせしましたように使わせていただきました。ここにあらためて紙上を借りまして、各期幹事さん並びに同窓各位の温かいご協力に厚くお礼を申し上げます。特に、仕事や子育てに多忙であるにもかかわらず募金に奔走して下さった若い期の方々のご好意は終生忘れないものであります。なお、特に高額なご寄付をいただいた五期を紹介させていただきます。

59期	一六〇万五千円	（92人）
79期	一五二万千円	（159人）
70期	一四四万千円	（227人）
63期	一二三万二千円	（123人）
69期	一二〇万千円	（109人）

（校内幹事　栃倉　浩）

新潟高校創立百周年記念講演会

所感 ―昔・今・これから―

36回　斎藤英四郎

只今ご紹介頂きました斎藤でございます。

創立百周年を迎えられた新潟高校、私が入学した当時は県立新中でしたが、この歴史ある学校の創立百年の記念講演者に選ばれ、皆さんの前でお話できることは私にとりまして一生の光栄と存ずる次第でございます。

私が在籍していた頃の習慣で、「中学」と呼ばせていただくことをあらかじめお断りしておきます。

まず最初に、ご関係の皆様とこの中学が百年を経て今日の姿にまで立派に成長し、国や社会に貢献する沢山の人材を生み出してきたことを皆様と共にお慶びしたいと存じます。

私は様々な場所で、沢山の方々を前にお話する機会がある度に、越後言葉の特徴で「イ」と「エ」の発音が判然としないことが気にかかっていましたが、今日は聴衆の皆様が皆新潟の人達であるということで、この「イ」と「エ」の発音の問題には余り気をつかわないでお話できるのが、先ず最初の喜びでございます。

私がこの中学に入りましたのは大正13年ですが、この中学が創立した今から百年前といいますと、明治24年頃でございましょう。当時は教育勅語、大日本帝国憲法発布等、わが国の封建国家から民主政治へのテイク・オフの時代、近代国家へ前進する夜明けの時代だったのではないのでしょうか。

顧みますと、私の少年時代は、学校へ行くにも、羽織袴で洋服・靴等はまだ一般化していない時代でございました。いまで言うピクニック、当時でいう郊外散歩に出掛けるときは草鞋を履いて、そして替え草鞋を背中にくっつけて出掛けたものでした。皆様ご存じのこの青山は、当時「青山の青狐」等、狐に化かされる話がいろいろ話題になるような、今では想像もできないような緑濃い松林がずっと続いておりましたし、新潟の市街には八千八川といわれる掘割に柳が繁り、柳の町といわれておりました。

『霞たなびく青山の松の緑の色深し』

という歌の文句の通り、この辺は自然に恵まれた土地でもございました。冬ともなれば、下駄ばきスケート、雪の多い日は板スキーなどに興じ、当時は今と違って、冬には雪が市内にも随分降りましたし、冬の町は凍てついた零度以下の氷の町でございました。考えてみますと、石川啄木流に言えば、『かにかくに新潟の町こそ恋しけれ　思い出の山　思い出の川』というところでしょうか。まあ、こうした昔の事、これはもう、60年も70年も前のことでございますから、ここにおられる方々には遠い遠い昔話にすぎませんが、私にとっては昨日のことのように思い出される次第でございます。

さて、創立百周年に因んでの話になりますが、私の関係する調査機関で調べましたところ、1901年、それはいまから90年くらい前になりましょうか、明治34年の正月に当時の報知新聞、今の読売新聞が百年後の日本、或いは世界はどうなるか、という予想記事を特集しております。それによりますと、百年後、即ち今頃は、無線電信電話が世界に発達してどこでも自由に通話できる、また天然色の、今でいうカラーテレビで戦場がそのまま写るような状態になるだろう、野獣は殆ど滅亡している、世界一週は七日間位（当時は80日くらい）で可能となる。また、暑さ・寒さ知らずの設備、所謂今でいうエアコンでしょうが、普及しているだろう。燃料も通信も全て電気の時代になるだろう、鉄道も時速150マイルで東京・神戸間は一時間半くらいになるだろう（当時20時間）、片や自動車も大いに発達して乗り物は自動車が主になる時代も来るだろう等々、殆ど百年後の今日の姿を当てていることに私はビックリしたのでございます。中には、人と動物が自由に会話できる時代になる等、まだ実現に至ってない卓見もございます。

しかしながら一方で、月の世界へ旅行できる宇宙衛星の時代到来は当時全く考えられておりません。いまのスペースストリップは遠い遠い夢の時代であって、月は眺めるもので、人間の手に届くものとは想像もできなかったようです。そうした意味では人類は想像もできないほど急速な進歩をこの百年間で達成してきたということをつくづく思い知らされたわけでございます。その反面、大きな各国間戦争を何回も経験したことは忘れられません。

因みに、今から百年前の明治26年の日本はどんな状態だったか簡単に触れますと、一番人口の多い県は何処だったとお考えでしょうか。新潟県が171万で、東京府が161万で、3府43県のうち、新潟県の人口が一番多かったのです。新潟は、文字通り農業の中心として日本の衣食住の食を支えておったということがはっきりするわけでございます。また当時男女の寿命は、男性・女性が42から44といいますので、正に「人生僅か50年」の時代で、昨年調査した現在の男女の寿命が約80歳を越えていることを考えますと、人の寿命は随分と短かったのでございます。

また、明治23年には日本の自動車はたった一台きりで、どうも横浜の外国の商館が所有していたものだけのようです。それが今はご承知のように、6000万台近い自動車が国内に動いているのを見ると、誠に今昔の感にたえません。この百年間に素晴らしい文明の進歩が予想以上のスピードとスケールでみられたわけでございます。

考えてみますと、こうした素晴らしい想像力は、飽食の時代よりも、むしろ空腹の時代に、より発揮されるのではないか、と皮肉りたくもなるわけでございます。そこで同じ機関で『これから百年後はどうなるだろうか』という企画をたて、学者や実業家他、多くの方々に昨年アンケート調査を行いました。その結果を見ますと、現在の科学技術進歩の延長線上にあるものがほとんどでございました。

時速500kmのリニアモーターカーが完成しているが、更にそれを越える新技術が開発されているとか、自動車の燃料は電気、太陽エネルギー、メタノール等になるだろうとか、人間とは変わらぬ働きをするロボットの時代になるとか、通信機器の発達で在宅勤務（事務所は要らない、自分の家で仕事する）ができるようになるとか、航空機は垂直離着陸をし、マッハ6以上のスピードになるだろうとか、地球を外から見物するための観光用宇宙船が就航するとか、或いは海底都市、地下都市が普及するだろうとか、あの恐るべき台風をコントロールできるだろうとか、一部火星に移住するだろうとか、ガンを含む全ての病気は制圧される等々、百年前に今日を予測した当時の人々の想像力に比べると、何か物足らない気がするわけでございます。

さて、科学技術の目まぐるしい発展と世の中の大きな変化を考えるうちに私はこのように社会環境、生活様式等が激しく変容する中でも、百年前も百年後も変わらないものはなんだろう、という新しい観点から、一つの考察をしてみたくなりました。

世の中で不変のもの、それは物的な形而下的なものではなくて、形而上的な人間そのもの、或いは人間の本性に根ざしたものではないかという気がするのです。例えば男女の恋愛観。これは万葉の昔、源氏物語の昔から今日まで殆ど変わっておりません。西洋でも、昔のロメオとジュリエット、或いはカチューシャといった悲恋の物語は、いまもなお、多くの読者が感銘して読んでいるわけでございます。或いは勧善懲悪の思想。今でも「水戸黄門」、「暴れん坊将軍」とか、「銭形平次」とか、こうした正義に味方した愛情のある番組は視聴率が非常に高いと聞いておりますが、人間の正義に対する愛着、こういう心根は今日まで数千年、古今東西に脈々とつながっている事がわかります。

斎藤英四郎氏

また、人生観、哲学、政治、経営、こうした問題につきましても、殆どかわりがないことがわかります。宮沢総理は中国千年以上前の荘子・老子・論語といった、いにしえの政治や哲学をこの夏中じっくり勉強しておられたという記事が新聞に出ております。また、つい数年前には、山岡荘八氏の書かれた『徳川家康』という歴史小説を、日本の新しい会社経営の指針をさぐる経営学書として皆で勉強しようということが言われました。現在の経営者に一筆座右の銘を、と申し込めば、大体菜根譚とか、或いは漢詩の引用を用いるものでございます。このように、人間の叙情的なもの、ロマンの世界、人間の本性に根ざしているモラル、倫理の世界は何千年も不変であり、時の流れを超えて共通であるということに気がつくのでございます。

今巷で、さも新しいことのように言われている「自然との共生」とか「環境問題」という話題でも、百年前、既に徳富蘆花が『自然と人生』という本の中で述べている自然に対する愛情思想の焼き直しであり、決して新しい思想ではございません。

科学技術の素晴らしい進歩により、私共の物的生活環境は今後益々、予想以上に内容豊富になっていくと考えられますが、一方で、温故知新といいますか、昔から変わることのない、人間の心に根ざしておる眞、善、美は大切にしてゆきたいものです。人類は戦争の悲しみを身にしみて感じ、この不幸な経験を次の世紀に活かして平和への誓いを固めております。

さきの総理府の調査によりますと国民の70％以上が、今後の理想として、物の豊かさよりも心の豊かさを求め、小さい乍ら平和な家庭を築きたいとの願望を持っていることが、アンケートの結果にでておりますが、ただ利己主義的に自分の家庭だけを幸せにしようとしても、望みが達せられるとは思いません。「世界は二人の為にある」等の考え方はもってのほかで、「二人は世界の為にある」という発想でなくてはなりません。

その根幹にあるもの、隣の人、また友人も、よその国の人も皆が幸せになること、世界の幸せ、皆の幸せがあってこそ初めての自分の家庭の幸せというものが生まれて来るのです。他の貧困や他の不幸せの外にあって、自分の家庭だけに幸せが築かれることはない、ということを皆が知るべきだと私は思います。今流行の言葉で言えば、皆が「地球に優しくなる」ことです。また最近盛んに議論されている「共生」の考え方も共存共栄、自分だけでなく皆の幸せを願うということです。相手の人、企業、国のことも考えにいれることです。

大切なことは、皆が心に普遍的な愛を持ちつづけることにあるのではないでしょうか。親に対する愛、兄弟に対する愛、友人に対する愛、国に対する愛、愛というものが、全ての人間模様を築いている縦糸・横糸ではないでしょうか。これが織り間違えられると大は国家間の戦争から小は家庭不和、友人との仲違いになるのでしょう。勧善懲悪の思想も、正義を愛する心、人を愛する心、友達を愛する心から生まれるのであり、「愛はロ

マンやモラルのふるさとでもある」と私は主張したいと思います。

愛を持った人になるということは、わかりやすくいえば周囲の人々や物事について、自分のことを考えるのと同じレベルで考えてあげる度量を持つ、ということです。言い換えれば、大いなる人になるということです。私がこの新潟で子供時代に愛唱した詩、誰がつくった詩か、誰から教わったかも覚えておりませんが、「大いなる人」を描いた詩を披露したいと思います。

広野の果ての白雲は
　巨人の如き姿もて
　　五月の空に現れぬ
われは幼き童の
　草にまろびて叙事詩をば
　　悲しく読みてありけるが
雲の巨人は厳しくも
『子よ、大いなる人となれ』
夕べ野を吹く風ありて
　雲の巨人は音もなく
　　ゆれて崩れて失せしかど
五十路をこゆる今も尚
　啓示となりて残るなり

私はこうして皆の前に来る前に急に勉強してきたのではありません。これは私が小さいときから暗唱していた、一番好きな詩です。この詩でいう雲の巨人の語った「大いなる人となれ」という意味は、世俗的に偉い人、有名人になれということではなく、豊かな愛を持てる心の広い人になれ、ということでございましょう。

アメリカから北海道の大学へ来られたクラーク博士はあの雄大な北海道の大地を踏んで、北大の学生を前に「Boys, be ambitious」と言いました。今ならさしずめ「Boys and girls, be ambitious」となるのでございましょうが、この「be ambitious」という言葉には、社会的な高い地位を得るとか、いわゆる世俗的な成功をおさめることを強調するのではなく、むしろ大いなる人になれ、つまり広い愛を持てる人間になれという願いがこめられていると思います。

もし皆が愛を持った人になれば、日本が国際的に孤立したり、日本は利己主義的である、自分のことばかり考えているというような非難は起こらないだろうと思います。現在は日本でも、フィランソロピーとか、社会的メセナ等、人類愛的な運動が起きておりますが、「Boys, be ambitious」、「大いなる人となれ」ということが実現すれば、日本国民は世界に愛され、世界を愛し、世界を指導できる国民になるのではないでしょうか。『心貧しければ大天地も大ならず、心豊かなれば、小天地も小ならず』という禅のお坊さんの言った言葉がありますが、全ては心の持ちようによって、世界は大きくもなり、小さくもなる、人を愛することができるなら、その人は大きな人になれるのです。私共はみな自然を愛し、人を愛することができるような、そういうおおらかな人になろうではありませんか。そうすることによってはじめて、国民が期待する「ゆとりある小さい乍ら平和で安定した家庭の幸せ」が実現できるのではないでしょうか。

私は昨日、東京の自宅へご送付いただきました『青山百年史』を拝見いたしました。その中に当校創立30周年記念式典の際の「ベルダンからバーグへ」と題した青木得三氏の記念講演が掲載されておりました。大正11年のことです。人類の悲願として戦争から平和への願望が強調されており、全く同感を禁じえませんでしたが、実際はどうでしょうか。

あれから20数年のうちに、再び世界ぐるみの第2次世界大戦が勃発し、再び多くの生命が失われ、都市が破壊されるという愚が繰り返されました。とどのつまりは原子爆弾投下という不幸のもとに戦争は終結しましたが、その後もはや戦争は出来ないと知りつつも、武器はむしろ原子力による核装備が進み、所謂東西冷戦の時代に入りました。

しかし最近、漸く米ソ間の冷戦が融け、自由主義と社会主義の争いも一応けりがつき、今や世界は国連中心の共生主義になりました。困っている時は隣の村へ餅つきの応援に行く、新潟県民の相互扶助精神でもありましょう。国も企業も個人も相手を打倒することによってのみ生き残る、という哲学に代わり、相手の立場を尊重し、共に生きる愛ある共存共栄が一般通念になってきたのであります。

人間も企業も強くなければ生き残れないが、情愛がなければ生きる資格がないということが理念として定着してきたのです。

現在は戦争と闘争の歴史の大転換期でありますが、これも終点ではなく出発点で、新しい21世紀にはまだどんなことが起こるのか誰にもわからないというのが真実でしょう。

ここで最後に付け加えますのは、正に百年前に発布された教育勅語のことです。そこには私が申し上げてきた愛の心が全て網羅されております。

私は暗唱しておりますので、申し上げましょう。前段は省略して、

父母ニ孝ニ　兄弟ニ友ニ
夫婦相和シ　朋友相信シ
恭倹己ヲ持シ　博愛衆ニ及ホシ
学ヲ修メ　業ヲ習ヒ　以テ知能ヲ啓発シ　徳器ヲ成就シ
進テ公益ヲ広メ　世務ヲ開キ　常ニ国憲ヲ重シ　国法ニ遵ヒ
一旦緩急アレハ　義勇公ニ奉シ

云々と人倫の道を説いておりますが、正にこれはいつの時代にも、また世界どこにでも通用する、変わることのない愛から発する人間のモラルを説いているのではないでしょうか。教育勅語には、百年前も百年後のこれからも、日本だけでなく世界にも通用する愛の精神そのものが示されていると思います。

私は今80歳、ロマンを愛し続け、長い人生を過ごしてきて、何がお前の哲学であるか、と聞かれたら、私は特別宗教に関心を持つ者ではありませんが、愛する心こそ全ての問題を解決する鍵であり、全ての人がお互いにみな愛を持った、ゆたかな心の、大きな人になることを心掛ければ、皆が楽しめる理想の社会、豊かで平和な家庭をもてるようになることを私の人生体験が教えてくれました、と答えましょう。

その私の考えかたを皆さんにも率直にお伝えして貴重な記念講演を終えます。本当にご静聴ありがとうございました。

創立百周年式典に参加して

28回　松浦　茂路

創立百周年記念式典及び祝宴は大成功裡で終了しました。これも偏に会長以下関係者の、この日を期して、数年前から努力された賜と存じ深謝申し上げます。

記念講演はお二人とも記念講演としてふさわしい立派なものであり、孰れも青山同窓のこととて、えらい人がいるものと感心して居りました。大会から二週間后、或る会合で、講師永井梓氏は故新大名誉教授永井行蔵氏（三三回）のご子息であることを承知し驚きました。実は行蔵氏と私は下田村笹岡小学校の同窓であり、四十余年の交際に拘わらずそのご子息のことは一言も言及しなかったからです。

青山百年史は、また、百年の歩みを網羅（もうら）されて、後世に残す立派なものです。

私はこれにより、忘れたこと、知らなかった事を発見しました。例えば、相撲部で土俵開きに横綱から稽古をつけて貰ったことは覚えて居りましたが、それが横綱太刀山であり、時は大正五年六月であることを知りました。また、短艇部で醵金により毎日選手に生卵を呑ませたことで岡村昌太郎先生から誰の許可を得てやったかなど、長々と油を搾られましたが、あれなど先生が短艇部長であることを知らなかったから起きた問題でした。

「玲瓏の天」

45回　扇　嘉家

体調をととのえて、十月十七日を待っていた。はやばやと青山百年史、青山同窓会会員名簿が届けられ、ページをくるうち懐旧の念は高まり、いささか興奮ぎみで当日を迎えた。母校創立百周年記念の計画が伝えられ、若干の協力をしながらこの日を待つ月日は永いものであった。毎年の同窓会に出席するたびに、同期生の計に接するし、用意されたテーブルは小さくなり、そしてステージの方へ確実に近くなってゆくのである。旧友と苦笑し合ったものである。時には脚を鍛えたりもするが、紫煙と美酒を愛する毎日であってみれば、一生の突然の終焉に文句は言われないと思うのである。しかし極めて頑健なうちに当日を迎えることができた。しかもすばらしい晴天であった。感謝のほかはない。

記念式典終了後、祝賀会場への移動にバスが用意されてあった。我々四十五回生までは先頭のバスであった。最年長の先輩は二十八回の松浦茂路氏（九十三歳）ご一名であった。傍に座り祝意を表し、長寿と健康にあやかりたいと心から思ったのである。この先百十周年までは何とかいけるが、百二十周年までとなると奇跡である。小生今年は七十二歳である。

校歌、応援歌の曲の流れる祝賀会の席についた。来賓等の多数のため、大部分は立席で、一部の先輩に椅子が用意された。夫人同伴の先輩もいる。佳いことである。次第通りに祝賀会は進められた。小生在学中端艇部で、放課後白山浦の艇庫へ通う毎日であり、自分の身辺のことで精一杯で本校の状況に疎いことが多いので、記念誌を見て初めて知ったこともある。昭和十三年卒業以降戦争へと続く時代であってみれば、それも無理からぬことであろう。今回の青山百年史の三〇五ページを見て、初めて競技部の一六〇〇米継走で全国制覇したことを知った。祝賀会場で、当時のアンカー高橋敏雄君によりレースの模様を詳細に聞くことができた。感激であり、大収穫であった。なおわが端艇部が、古都蕭々の歌に泣く幾春秋の末、昭和十二年八月、隅田川で横浜商業を抜き、沼津中学に勝ち、関東選手権大会の覇者となり、東龍太郎記念盃を手に母校に凱旋したことが数行ながら記録されていた。感謝のほかはない。なおこの関東制覇は数年続く。

なごやかなうちに祝宴は続いた。古町芸者の新潟おけさもよい。美しいものであった。しかし、応援歌の合唱と、「玲瓏の天」の大合唱のなかったことは実に残念であった。「画龍点睛を欠く」というものである。来賓を多数ご招待した宴席であるための遠慮か。

母校の式典より数日後、テレビが、三条高校九十周年記念の番組を報じていた。卒業生、在校生の母校と、校歌によせる思いが、実に美しく、見る者に好感を与えてくれた。幾度となく校歌が流された。中学から高校へと校名は変わっても校歌は同じである。番組の最後の場面は、祝宴での校歌の大合唱であった。斉唱なんてものではない。かつての三中、三高生徒が、三角の応援旗を振り、こぶしを振り声を限りに唱っていた。歌詞の「風空嚢を翻し」は「玲瓏の天」と同様に格調高く、曲は一高寮歌の「春爛漫の花の色」がこれに似ていた。

平成五年度の同窓会総会で「玲瓏の天」を唱うことを今から楽しみにしている。

記念式典に出席して

45回　酒井　敏行

「玲瓏の天あふぐ時」に始まるこの校歌は旧制中学校で学んだ私にとっては忘れられない歌であるばかりでなく苦境に立ったときに口ずさみ自分を鼓舞した歌であった。百周年記念式典に出席して式次第の校歌斉唱でこの校歌を歌えなかったことは如何にも残念であった。吾等老雄の意気をこの歌をとおして在校生諸君に聞いてもらいたかった。新潟高校創立百周年記念であるので高校校歌「百里流れて」を歌えば事足れりとする理由も分からぬわけではないが。

また、この式典に同期の「カシケン」こと柏崎賢太郎君が青森県下北からはせ参じてくれた。古稀を過ぎめったに会うことのない友の元気な姿に接する感激は格別のものがあった。「カシケン」よ、元気でまた新潟に来てくれとの思いで一杯である。

聞こゆる無きを恥ず

46回　富所　強哉

久々の「礼」の号令に驚き式典の主体が在校生であることに迂闊にも初めて気付く。

在校時に昔のことと思っていた日清戦争と当時以上の年代差が私達との間にあるこの人達が青山百五十周年の式典に列する時の日本の姿はどのようなものであろうか。その日に向けて世界を少しでも良くしようとの情熱に、在校生諸子がこの日の感激を転じて欲しいと強く望む者である。

卒業後五十余年の自らは、孔子が畏るるに足らずとした四十五十どころか、青山に学んだ身で七十余才まで聞こゆる無かりしを恥ずるのみ。

百周年を祝う
＝思えば懐かしい六〇周年＝

62回　神成　粛一

私達は高二の時に新潟高校創立六〇周年を迎えました。昔、現在の県医師会館脇の公園にあったアメリカ文化センターの館長さんに英語を学びながら「世界を結ぶ手紙」のスローガンのもと高校内にもPen Pals Club があって六〇周年の催しのひとつとして教室に海外の友達と交換した手紙、写真、絵葉書、本、雑貨などを展示、その中には当時としては余りなかった香りのたかい石鹸、パーカーの万年筆、珍しいコダックのカメラもあってカメラの前には「さわらないで下さい」と大きく書いてあったのを覚えています。私も展示飾りつけにたずさわりましたが、四〇年前のアメリカと日本の文化の隔たりは今は昔の話となりました。

百周年を迎えたいま、学友も各界で中心をなすような時代となり、記念すべき講演には友人の永井梓君が招かれ素晴らしい話を在校生諸君と共に聴くことができ、そして懇親会では多勢の方々と和やかなひとときをすごすことができ感無量の思いです。

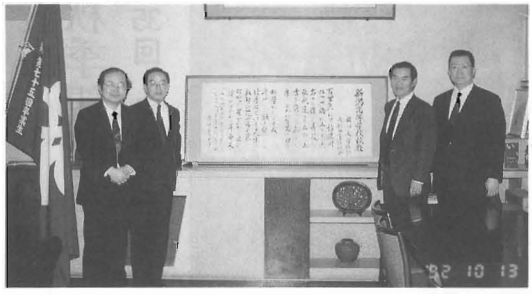
新潟高校がこれからも素晴らしい未来をめざし、益々発展していきますように心からお祈りしております。

卒業三十周年に寄せて

69回　石本隆太郎

「光陰矢の如し」と申しますが、昭和三十六年三月に青山を巣立った我々六十九回生も、早くも「天命を知る」年頃となりました。一昨年の秋に、湯沢温泉の「雪国の宿　高半ホテル」に、卒業三十周年記念大会と銘打って、折からの台風をも物ともせずに、六十名余りの同期の桜が相集い、旧交を温めたのも、つい昨日のことのように思い出されます。

その準備を兼ねてのクラス幹事会の席で、卒業三十周年を記念して、学校に何か記念品を贈呈しようとの話が持ち上り、新潟高校創立百周年の募金活動と併せて同期生に呼びかけた結果、最終的に一一五名から協賛金が寄せられました。瀧澤校長先生を通じて学校側の要望をお伺いしたところ、体育館の正面横に飾る校歌の横額がよいとのことになり、漢文の恩師でもある、渡辺秀英先生に揮毫をお願いすることにいたしました。



昨年の夏、敦井栄一君、栃倉浩君の三名で渡辺先生のご自宅にお伺いし、心良くお引き受けいただき、十月の創立百周年の記念式典に間に合うように書き上げていただきました。原本はそのまま表装して校長室に飾っていただくこととし、それを大きく拡大したものを、体育館の正面横の壁に掲げていただきました。

我々、青山健児の心の寄り所でもある校歌の精神が、後輩の諸君の胸に末長くとどまることを願うとともに、同窓の皆さんも、ご来校の折には、ぜひ一度、ご覧いただきたいと思っております、

後輩の活躍

○水泳部　秋季県大会　男子百米自由形三位　勇崎義紀　男子二百米自由形二位　勇崎義紀　女子百米バタフライ一位　小懸文（大会新）

○卓球部　県選抜大会　女子団体二位（長嶋、藁科玲子、藁科綾子、山名）

○サッカー部　全国高等学校サッカー選手権県大会　準優勝

○ラグビー部　NHK杯　ベスト8

○柔道部　BSN大会　男子団体　ベスト8　女子48kg以下級優勝　鈴木優子

○フェンシング部　秋季県大会　男子団体二位、女子団体二位　男子フルーレ一位　五十嵐啓人　同二位　磯辺直孝　女子フルーレ二位　米岡紘子

○剣道部　BSN大会　男子団体三位　女子個人三位　加藤智子

○男子バスケット部　全国選抜県予選　三位

○空手道部　県選抜予選　女子団体型優勝　北信越大会　女子団体型二位（白根、三上、小山）

○囲碁部　全国高校囲碁選手権大会県予選　男子団体優勝（中野、杉浦、西脇）　女子団体二位（伊倉、神田、伊藤）　同全国大会ベスト8　中野祥孝

○物理部　オールJAコンテスト信越三位　フィールドディコンテスト信越一位、全国七位

四二回　同期会

42回　菊地　勲

二年ばかり温泉地を会場にしたので、今年は十一月十四日午後六時、恒例の篠田旅館で開催することになった。

県外からは、仙台から小泉俊平君、横浜からは常連の鳥羽正隆君、東京からは東城真佐男君が参加した。

金沢裕君、高橋吉郎君の両医師も久し振りに参加。いつも乍ら頼母しいのは、約十名の常連が、常日頃陰に陽に暖かい應援と励ましをしてくれていることである。

岡嘉一君、長谷川頼清君は、未だ地方産業発展のため職場の第一線で陣頭指揮をしている。両君とも夫々ポルトガル、台湾へと海外出張で、残念乍ら欠席。総勢十九名の出席となった。

開会に先立って例により大野名写真技師をわずらわして記念撮影。

司会、高山幹事、会務報告…（母校創立百周年記念の募金、59人より67万円）、その他報告、菊地幹事、黙禱…鳥羽君、乾盃音頭…東城君により型どおりに進行した。

今年は久し振りに多勢が出席したので、あちらこちらで思い出話に花が咲き、時の経つのを忘れさせた。

阿部辰一君の指揮、高山雄次郎君のハーモニカ伴奏で校歌斉唱、つづいて往時を偲び、丈夫のたばさむ征矢のと、声高らかに應援歌を合唱、会は最高に盛り上がった。

連絡事項、今年は喜寿の年で、人生の記念すべき節目の年である。同期会は紅葉の頃に、新潟と東京の中間の越後湯沢で行う予定である。多勢の参加を期待する。

出席者　写真後列右より広沢斉、有田賢一、西山秀夫、神林駒年、今井包和、横山四郎、羽田軍次、大野総一郎、

中列右より　高山雄次郎、篠田富衛、高橋吉郎、薄田開元、菊地勲

前列右より　阿部辰一、小泉俊平、東城真佐男、鳥羽正隆、豊岡憲夫

（遅参金沢裕）

『在京新中三五会　秋季親睦会』

35回　尾崎　三夫

今秋は、母校創立百周年の記念式典挙行を祝し、当会発足以来の世話人尾崎を労ふ目的で、山名栄一君が、十月七日（水）正午に、品川駅前ホテル、パシフィック内『冠園』で開催。会員十一名同伴夫人三名計十四名で、賑やかな午餐会を歓談裡に二時終了。終って恒例の写真を撮る。尚、会員小林商司君が、去る八月四日永眠、告別式には、山名、丸山、近藤、尾崎参列。

出席者左記の通り

入沢健三、岡四四亥、熊倉雄三、近藤百之、籠島秀雄、斉藤昌治、笹川正男、丸山求蔵（同夫人）、山名栄一（同夫人）、渡辺秋策、尾崎三夫（同夫人）。

青山RFC新年会

一月六日青山ラグビークラブの恒例の新年会が「よこ路」で開催されました。

当日は24名のOBが出席、全員のラグビーに対する熱気で寒さもふっとばし、士気も大いに盛り上がりました。

酒がすすむにつれ段々と親睦の輪が広がり最後は一本締めでお開きとなりましたが、引続き全員二次会を「カンタベリー」に移し、ラグビー談義に花を咲かせました。

しかし今年は現役が正月を花園で迎えられないことは誠に残念でした。

当日の出席者次のとおり

藤井泰介（56回）、加藤吉策（58回）、歌代荘平（58回）、斉木守雄（60回）、岸田哲男（61回）、折戸明（72回）、丹羽正之（72回）、木村廉平（77回）、小沢幸栄（77回）、山田一裕（79回）、三膳惣一（79回）、阿部哲夫（80回）、片山修（80回）、宮原務（80回）、味方利光（82回）、豊嶋俊郎（82回）、笹川久夫（82回）、天野忠（83回）、岡本春彦（85回）、中川厚志（87回）、野口康（87回）、吉岡潤（88回）、山田修敬（90回）、隅木信利（90回）

（数字は卒業回）

新潟高校ラグビー部にたいへん尽力された関根先生の退職記念パーティー（当クラブ主催）の概要が決定しましたので併せてご案内致します。詳細については再度ご案内します。

日時　4月17日（土）
午後3時～6時

場所　ホテル新潟

（文責　斉木守雄）

グァテマラに先輩を訪ねて

67回　片桐　靖忠

昨年七月、私はロスアンゼルスに留学中の次男を連れて、はじめて、新潟高校、大学で二年先輩の児島英雄さんをグァテマラに訪ねた。児島さんを、二十七、八年前、横浜の港へ送りに行ったことが昨日のように思い出された。一ドル三百六十円。そのころのアメリカはまだまだ遠い国だった。数年して、ロスアンゼルスだ、メキシコだ、いやグァテマラに居るそうだと風の便りに聞いた。二年前、ひょんなことから六本木の南米音楽をやるレストランのマスターと話をすることになり、グァテマラの話になった。「児島さん？よく知ってるよ、電話してみよう」。電話の向うには新潟弁を残した児島さんの、のんびりした声があった。「しばーらくらねー。元気らー」「ええ、近いうちに遊びに行きます」「こいて、まってっろ!!」それでも何やかやと忙しく、しばらく忘れていた。昨年七月ロスアンゼルスでの仕事が終り、もう一週間ほど時間がとれそうだということになり急に児島さんに電話を入れホテルの予約をしてもらった。

広告制作をしている関係で、年に五、六回は海外へ出かけていくが、グァテマラは全くはじめて。近年、政情が不安定な中米の或る国。マヤ文明で有名な――。という程度しか思い浮かばないグァテマラ。

七月だというのに高地のせいかギラギラという暑さがない。児島さんは全く昔と変わらないやさしいまなざしで迎えてくれた。肩書きは「人類学者」「考古学者」「染色研究家」など色々。グァテマラでは有名人で日本から多くの方々がお世話になっている。

児島さん（右）と博物館の中庭で

街はやはり発展途上国なみ。古い車と人がゴチャゴチャ。しかし、ちょっと街を出ると美しい自然と山村。マヤ文明が隆盛を極め、そしてある日突然消えてしまったというナゾにつつまれた歴史をしょいこんだマヤの末裔たちが、昔のままの生活を営んでいるという。その人々が、物物交換をする市に入ると自分もその人々と同化できるような気がした。

マヤ文明の栄華を残すピラミッドをジャングルの中に見つけたり、反政府軍に車をとめられ冷や汗を流したりしながらの一週間は私をすっかりリフレッシュさせてくれた。

「丈夫（ますらお）の優しさ」

75回　小島富美子（ふうどスタイリスト）

「これより25回めの補習授業を行う。初めに諸君の学力の維持率を調べるため試験を受けてもらう。」「エーッ！」という大きなどよめきと供に、教室に集まった面々は、一気に高校時代に駆け戻った。教師は瀧澤校長。生徒は75回卒業生。団塊の世代である。級長福田君（福田組）が、昔と同じ口調で挨拶する。坊主頭に細い首を覗かせた学生服姿が浮かんでくる。勉強にスポーツに自分の場所を心得ている人だった。今も社員に図書券を贈り感想文に返事を書いているという。努力家である。決して嘘をつけない顔を持つ富山君（中央ビル）は、ジョリーチャップス所属。合唱コンクールの指揮者を務めた時には、女生徒のみの原語の賛美歌を挿入歌に使うという洒落たことをして、しごかれた。心底ほっとする穏やかな笑顔の堀君（第一印刷）は、友人のラブレターの代筆ならぬ代案業をしていたそうだ。社員の協力のもと百周年記念の見事な名簿をつくった。数字覚えと言語の語源について驚異的な力を持つ加藤君（加藤建設）は、渋い落ちつきを見せた横顔にやんちゃな笑顔が交錯する。街中を美術館にしたいと夢を語る清水君（創庫美術館）は、逢うたびに泥まみれになってラグビーボールを追っている姿が鮮やかに蘇えってくる。いつも波の先を行く雰囲気を身につけていた永井さん（水原郷病院）は、やはり先取りのお洒落な女医さん。先取りと言えば、昨年、非業の死をとげられた五十嵐氏（筑波大、74回）の頭脳もこれからの時代に房わしいメッセージで満ちていたと思う。新潟の海で摘んだ月見草を枢にいれながら、あの脳細胞が沈黙してしまうのが無念でならなかった。小畴氏（設計事務所、74回）は、温もりのある脳細胞をお持ちだ。傘をまっすぐに持ち静かさを引きずって歩くその姿に、いつも自分の背筋が思わず伸びたものだった。25年を過ぎて丈夫（ますらお）の輪はますます広がる。集いの終りに歌う〝丈夫〟にようやく男のロマンと優しさを感じ始めたこのごろ。団塊の世代も人生の折り返し点を過ぎたのである。

同窓会名簿購入申込みについて

平成五年一月より同窓会名簿購入申込みされる方は、同窓会事務局で受付発送しますのでFAXか葉書にて申込み下さい。（卒業回数もあわせてお書き下さい）頒布価格五千円

FAX・二六六―五二六八

会員名簿の原簿訂正について

昨年同窓会会員名簿が作成されました。この名簿の原簿はコンピューターに記録されております。今後とも正確さを保つために毎年一回会員からの申告に基づき原簿を訂正して行くことになりました。会員の名簿記載事項に変更がありましたら、書面又はFAXにて青山同窓会事務局までお知らせください。訂正は5月に行います。訂正された名簿から「宛名シール」として打ち出したり、期別名簿の作成など、同窓会活動、同期会活動に利用していただくことができます。利用につきましては事務局までお問い合わせください。

オーストラリアに注目を！

90回　木村　和人

青山同窓会の皆さまはオーストラリアについてどんなイメージをお持ちですか？ オーストラリアは新婚旅行先の人気ナンバー1になりました。ゴールドコースト、グレートバリアリーフ、コアラ、カンガルー、そして輸出品として鉄鉱石・石炭やオージービーフなどは広く知られているようですが、まだ観光と天然資源の国というイメージが強いでしょうか？

しかし、最近オーストラリアは少しずつイメージチェンジをしています。観光の振興や一次産品の輸出に加え、ハイテク製品やサービスの輸出も促進するのが私達マーケティングスタッフの役割です。その中で私の所属するセクションはオーストラリアのサービス産業が日本へ進出するための支援を行い、私は特に、建設コンサルタントや設計事務所の紹介やオーストラリアへの航空留学の促進を担当しています。今年はその他に映画、音楽等の仕事も多くなりそうです。ただし、サービス産業はまだ、国際競争力に欠ける分野が多く、しばらくは日本の市場調査が続きます。

幸い、市場調査にあたっては、多くの先輩方が様々な業界でご活躍になっていらっしゃいますので、東京青山同窓会でお会いしたことのある先輩を訪問させていただき、お話しを伺ったり、さらに他の方をご紹介したりと大変お世話になっています。

ところで、新潟在住の皆さまにも環日本海経済圏だけでなくオーストラリアを注目していただきたいと思っています。そのうち私が、県庁、市役所、そして関係業界を訪問したいと思っていますが、決して某国のように外圧などは使いませんので暖かく迎えて下さい。まずは新潟市民文化会館の設計コンペでオーストラリアの設計事務所も日本企業とジョイントで参加しますのでご注目を！

大切な誌面をお借りして宣伝ばかりしてしまいましたが、私もできるだけ皆さまのお役に立ちたいと思っていますので、オーストラリアに関するどんな小さなご質問でもお気軽にご連絡下さい。また学生の皆さんの旅行や就職等の相談にも応じます。

オーストラリア大使館
マーケティング事務所
〇三―五二三二―四一八八

空手道全国高校選抜大会出場
チームワークを大切に

空手道部二年　白根　由香

十一月十四、十五日の両日、石川県金沢市で行われた全国高等学校空手道選抜大会北信越地区予選会において、私達は女子団体型の部で二位になり、全国大会の出場権を獲得することができました。これは私達自身、全く予想していなかったことで、これまでの練習の成果がこのような形で表れたことは、大変嬉しいことでした。また、先生方をはじめ、先輩方や同輩、後輩達など私達を支えてきて下さった方々に対して、心から感謝しています。

私達は入学した昨年度の春から一年半、空手道部員として毎日練習に励んできました。私達の部は、校内に空手の技術の指導者がいないので、外部から教えに来て下さる先生方のもとで、主に自主的な練習を行ってきました。ですから、普段の練習で私達に多くのことを教えて下さったのは先輩方でした。練習内容は基本を重視し、基礎練習を繰り返し行ってきました。

一年生の時の夏休みは、合宿をはじめ、OBの方々の指導による体力作りなどによって、肉体的にも精神的にも向上をはかることができました。また、冬は道場の床がとても冷たく、裸足でそこに足を踏み入れる辛さをこらえて、一生懸命に練習しました。

一年が経ち、今年度の春季大会で先輩方が引退し、私達二年生中心の練習が始まりました。二度目の夏は、昨年よりも高度な技術が課題として与えられ、更に厳しいものになりました。そして、夏休みが明け、秋季大会が近づいてきました。

毎日、下校時刻ギリギリまでの練習が続きました。その甲斐があって、地区、県大会と勝ち進み、昨年秋、今年春に次いで三度目の北信越大会への出場権を手にすることができました。全国大会へは北信越大会の上位三チームが出場できるということでした。しかし、その時の私達にとっては、全国大会出場などは念頭になく、前二回とも成し遂げられなかった北信越大会での予選突破が唯一の目標でした。学校での練習だけでなく、指導の先生が主宰する鳥屋野体育館での夜の練習にも参加し、多数の先生方の指導と励ましを受けて、十一月十三日、私達は金沢へ向かいました。

十四日、緊張の中で予選が行われました。そして、私達はなんと予選Aブロックを一位で通過したのです。信じられませんでした。

翌十五日の決勝では、新潟県の他の高校の選手達からの激励を受け、私達は渾身の気合を込めて演武しました。得点は、一位の松商学園（長野）と〇・二差の四〇・三でした。

団体型競技は、女子の場合三人で型の演武をするもので、三人の息が合っていないと高得点はもらえません。今回は丁度三人いる私達が正選手として出場しました。この一年半の間、一緒に練習してきた私達が揃って全国大会に出場できるというのが、何よりも嬉しいことです。

全国大会は三月二十七、二十八日に、東京武道館（予選）、日本武道館（決勝）で行われます。これからもチームワークを大切にして一層練習に励み、全国大会では悔いの残らぬ演武をしたいと思っています。

喜びの空手道部女子選手（左から小山晴子、白根由香、三上範子の皆さん）

＝連載＝

ハイティーン水泳 ⑯

60回　平田　大六

27 東京もはじめて

一九四九年、高校一年の九月、私は第4回国体水泳競技の四百メートル補欠選手に選ばれて、横浜へ行くことになったのだが、出発前に大黒善弥（50回）監督から、東京で省線電車に乗ったら戸がひとりでに開閉するから気をつけろ、と厳重に申し渡されていた。省線、国電、いまのE線のことである。

実はやっぱりこの時私は首をはさまれていた。電車の戸口からホームを眺めていたら、ザーッとドアが近づいてきたのだ。他の乗客もこれを見て大笑いだったし、帰ってから母にも、おまえは他人よりも首が短いのにのう、と笑われた。

会場の横浜市野毛山プールは坂道を登りきったところにあった。新潟高校からは、短距離の中村均（58回）、平泳の北井一郎（同）、背泳の児玉光一（59回）の先輩たちと私の四人だった。四百の正選手は高田高の竹内允、柏崎工の木村洋二だったと思う。選手団の役員の一人が、本当はおまえのほうが速いのだが補欠なので泳がせるわけにはゆかない来年頑張れ、というような意味のことを私に云われた。これについては、大黒監督は何故か、なにもおっしゃらなかった。甘やかしてはならないということだったのだろうか。

この時私は、全国的な大会をはじめて見たのだ。ニュース映画でしかそれは見ることがなかったから、フジヤマノトビウオの日本大学古橋広之進や橋爪四郎を筆頭に、高校ランキング一桁の選手たちの泳法は勉強になった。

やがて大会を終え帰る途中、上野発の夜汽車までの間、大黒監督は私たちを銀座四丁目へ連れていった。おまえらもう卒業だからと三年生にはジョッキ、私にはラーメンだった。村上高の片野卓弥選手の鼻の頭にいつまでも泡がくっついていた。

このような非合法の宴のあとで、私は、中央高校の年上の女子選手に連れられて夜店（よみせ）へ出ていった。夜店といっても、東京のそれはきらびやかなものであった。私は買うあてはない。彼女らにしてみても、東京の夜店にそれほど精通しているわけではないのに、その時の私からみれば非常に大人びてみえたし、時おりただよう彼女らのブラウスの洗タクのにおいが、夜気にここちよかった。

私がはじめて味わった東京の夜である。

28 不敗のライバルに再会

一九九二年一〇月一七日、私は新潟高校百周年の式典、祝賀会、60回生懇親会と三点セットで出席した。ハイティーン水泳が、いきなり一九九二年というサブルーチンにとびこませてもらって申しわけない。

一九時からの鳥屋野湖畔での60回懇親会で私は、大阪から出かけて来た山崎健に四〇年ぶりで会った。山崎のアダ名は中学の頃から「ガマ」である。が、山崎にはなんとなく年上のような風情があり、アダ名で呼ぶには恐れおおいような品格があったものである。

山崎は、百周年の夜新潟泊、次の日は瀬波へ泊って、一九日に私の酒蔵大洋盛へ若いとてもきれいな夫人を同伴して訪ねてくれた。

実は彼のアダ名はガマと云いましてね、と云うと夫人はニコニコして亭主を眺めまわされた。山崎は自分のアダ名のことは夫人に云ってないのだな、と私は直感し後悔した。「実は、新中に入ってから彼と私は一緒に水泳部へ入部しました。数十人の部員のなかで、彼と私が速かったものですから、一夏（ひとなつ）特訓をうけるはめになりました。

特訓というのは、彼と二人だけが、もっと速い二年生部員に混じって泳がされることです。彼にだけは私はどうしても勝てませんでした。そして、夏休みには郷里へ帰って私はサボッたものですから彼との差ははなれるばかりでした。私の目標は彼に勝つことだったのです。

その彼が、一年かぎりで水泳部を辞めてしまいました。そのあと私が県高校選手権をいただいたりしましたが、彼とはその後永久に手合せする機会はありませんでした。

私の多くのライバルのなかで、彼だけには勝つことができませんでした」

というような意味の話を私は、酒蔵の応接室で山崎健の夫人に申しあげた。もちろん、「」内の文中で実際は、彼というのはすべてガマという言葉に置きかえて私は話した。

夫人は笑いながら、あなた何故辞めたの、などと云われていたが、山崎健は、あの時はロッカンシンケイツーでと照れていた。しかし、私にとっては不敗のライバルにはかわりはなかった。（つづく）

青山同窓会収支決算書・収支予算書

収入の部

科目	平成3年度決算額（自 平成3年4月1日 至 平成4年3月31日）	平成4年度予算額（自 平成4年4月1日 至 平成5年3月31日）
繰越金	1,242,858円	2,762,000円
入会金	1,270,000	1,234,000
会費	4,168,560	3,500,000
雑収入	70,980	10,000
合計	6,752,398	7,506,000

支出の部

科目	平成3年度決算額	平成4年度予算額
人件費	1,132,680円	1,150,000円
通信費	689,058	720,000
印刷費	125,454	150,000
慶弔費	111,420	130,000
会報印刷費	432,600	500,000
会議費	386,063	450,000
卒業生記念品代	212,625	230,000
青陵祭補助	100,000	100,000
通信制補助	313,000	350,000
退職積立金	100,000	100,000
諸費	55,372	100,000
予備費	331,814	3,526,000
合計	3,990,086	7,506,000

収支差引残高 2,762,312円 次年度繰越

平成4年5月6日

上記の通り相違ないことを確認致します。

福山 健㊞
早福 卓㊞

編集後記

◇ 明けましておめでとうございます。去る十月十七日の百周年記念式典には、多数の同窓も参列され感激の一時をすごしました。その折の記念講演第一部、斎藤英四郎氏を掲載しました。もう一人の永井梓氏は紙面の都合で、次号に掲載します。

◇ 六年間にわたった連載小林智明氏の労作「画人笠原靱とその父漁村」は今号をもって一区切りといたします。長い間ごくろうさまでした。

◇ 百周年の節目、同窓各位には、色々感懐も多いことでしょう。別途発行の生徒会誌「青陵」の回顧特集に多数寄稿されています。（石）

画人笠原軟（じん）とその父漁村（二十二）

60回　小林智明

父の最後

明治四十五年三月の新潟新聞を見ると、軟は「冬の思い出」という新潟市内のスケッチを連載し、当時の風物を巧みに綴った短い文を添えている。三月十三日の夜鷹そばの屋台に坐している学生の図は、帽子の徽章がどうやら中の字の新潟中学生のようだ。「T君と一緒に、女学校の森田先生を訪ねに行く晩だった。古町のとある雁木裏の空地に、仮小屋の夜鷹そばで、冷へた腹を暖めた時、T君の姿はまだあどけなかった。それがちぎに○学士とか、いふ物になるんだそうだ。酒好きな森田先生は、もう此世に居ない。そばやの嬶あはどうしたやら。」の説明が読める。美術学校を卒業した彼には、こんな郷土の新聞の仕事の依頼が時々あったようで、新潟新聞にはその後も度々寄稿をしている。

明治四十五年は、七月三十日に明治天皇が崩じ、大正元年と年号が変ったが、父の漁村もまた新潟新聞の漢詩欄の常連で、大正二年九月七日の「詞林月旦」欄に、二年前の上京の際の詩を五首寄稿している。その中の一首は前号に紹介した三人鼎坐して酒を酌んだ詩であるが、もう一首「兒の軟を拉きて、墨堤（偶田川の堤）に遊びし途次、浅草の酒楼に飲む」という詩を紹介したい。

江楼呼酒憶曽遊　江楼に酒を呼んで曽遊を憶う
欄外長江一道流　欄外の長江　一道　流る
泛々　鷗皆旧識　泛々たる　鷗も皆旧識
白頭重到夢香洲　白頭重ねて到る　夢香洲

と軟を誘って向島に遊び、曽遊を憶いながら浅草の酒楼で飲んだ情景を詠んでいる。この時のことは、後年「遊方会雑誌」二十九号に寄稿した軟の『父の面影』の中にもくわしく述べられている。

大正二年、漁村は亡くなる前の年で六十才になっていた。体調も漸く思わしくなく、達筆に墨書していた寄宿舎の当直日誌もこの年の十二月廿二日で最後となった。その夜は大雪で、学校の屋上には四寸の降雪があったと記されている。そして翌大正三年一月九日を以って明治三十三年より十四年間、名物舎監として寄宿舎の生徒に慕われた舎監事務取扱嘱託の仕事も解かれた。

大正三年の夏、軟は岩越線廻りで帰省の途次、野沢から鳥居峠を歩いて津川に越え、二～三日附近を探勝していた。そこへ新潟より急報で父の医専病院入院を知り、急ぎ帰郷して病院の父を見舞った。『父の面影』には次のように記されている。

〃……「父さん」と呼ぶと、父の左方の眼が、夕闇に咲く花のようにパッと開いた。俺は蚊帳を捲って中へ入った。一種異様の臭が鼻をうつ、顔の繃帯は右眼の手術をした為で、緑内症と云ふ尤も危険な病で、それが入院の主病であった。他に内臓の故障を一ツ一ツ父は数へて、五指を屈する位あったが、それらはさしたる急激な変調はまああるまいと、父は平素のやうな元気な声で語った。俺は漸く心の落付くと共に、しみじみ父を眺めることが出来た。力なく投げ出された手足は見る影もなく瘠せて、黄く艶のない其肌に露はふ脉管が、時々ピクピク波打つのを見た。斑な鬢髪の陰の色褪た厚い唇をも見た。凝とそれ等をみて居る中に、俺の頭の中には此年頃、父に叛いて辿って来た生活の道程の、醜い記憶を喚び起して浅ましくなって来た。恐らく生れ落つるとから、一度でも父に喜悦と満足を与へたやうなことを俺はしなかったろう。時には悔恨の情は湧いても「そんなことは新らしい時代の家庭には、何所にもあることだ余儀ないことだ」と諦めたやうな反抗を起して、そしてローマンチックから高踏派、はた悪魔派の芸術に迄で彷徨して、生活と芸術の一致に、身も心も焼き爛らそうとした。そうした近代芸術の犠牲には甘んじて成っても可いが、目前に横はる父の病軀を見ると、新たな悔恨と鞭打たるるやうな良心の苛責を禁ずることが出来なかった。

俺の心には暫時の間、至純な慈父に対する感情が溢れた。父の顔にも平素の秋霜のやうな厳格さが消えて俺が静かに語る旅の話に耳を傾けて聞いて居たが、やがて「俺も良くなったら今年は一ツ姫路へ行って××に会って、須磨明石から瀬戸内海を観て、帰りは中仙道を甲府に出て、東京はもういいから銚子に△△を訪ねて、帰りに日光松島を見物し度いものだナァ」と間を置いて、「甲斐は俺が先祖の地だからな、是非行って見度い」としみじみした調子で言った。……〃

渡辺漁村夫妻墓（日和山）

半月ほどで退院後、学期試験も近づいたので義務観念の強い漁村は、学校へ行くと言い出し、病を押して登校したが、帰ってくるとグタッと床に臥せってしまうほどに衰弱した。

兄の轍も心配して帰省して来た。そんな或る日、漁村は白山の偕楽館へ蓮飯を食べに行こうと言い出して三人で出かけた。然し蓮飯は無く、二～三品の料理と鮓を注文して二人はビール、漁村は正宗の二合壜を注文して先づ一盃を傾けたが、「甘味く無い」と言って後は二人に渡した。『父の面影』には食事の済んだその後の様子を〃……父は俺に携へ来さした空気枕を取り出して横になった。外には蟬が頻りに鳴いて居る。川の面を渡って来る風、蓮の青葉を揺がして涼しく部屋に通ふ、遙に池中の噴水が碧翠の間に輝いて、堤上には行人の影は疎らに、何所ともなく艪声に連れて欸乃が聴えて来る。天地は将に睡を促したのである。父は微かな然し力ある鼾をかいて居る。其の夢は何を辿って居るであろう。何年かの前、同好の詩人と此処に相集って、詩筵を開いた当年の故旧は四散し、それ以来此処へ来たことのない父は、時々「偕楽館の広間に、一人で昼寝がして見たい」と言って居た。其の年来の希望が今遂げられた。父の寝顔には満足の微笑が漂うて居るやうに眺められた。……〃と記している。

これが親子三人の最後の団欒となった。やがて轍は帰京しようとしたが、虫の知らせか一度は寺泊から、その次は柏崎からと、汽車の連絡がうまく行かないのを理由に二度までも引き返して来た。

八月十四日早朝、漁村先生は妻キエ、轍、軟の二児、嫂のキクの四人に見守られて六十一才の生涯を閉じた。墓は日和山の共同墓地に建立された。正面に「漁村渡邊　墓」、側面に「君、諱は。字は美中。漁村と号す。佐渡相川の人なり。学を円山溟北に受く。気節尚く、詩文を善くす。新潟県に官すること三十余年。大正三年八月十四日、病みて新潟に歿す。享年六十一。配渡辺氏は先だちて歿す。二男有り。轍と曰い軟と曰う。後配江原氏は子無し。長子轍嗣ぐ。」と刻されている。

（おわり）

画人笠原軟の美術学校卒業の頃までの青春と、その父で、新潟中学校の漢文教師であった渡辺漁村先生の連載を今号で終ります。編集子とお約束の二十回も越えてしまいました。拙文を長い間ご高読頂き有がとうございました。尚、笠原軟の略歴と画業は、昨秋発刊の「屠龍山人笠原軟画集」をご覧頂ければ幸です。

平成四年度青山同窓会会費納入者名簿

（４月より12月まで納入済のもの）

未納の方は３月までに納入下さるようにお願い致します。

１口1,000円できるだけ２口以上でお願い致します。

（郵便振替口座　新潟５－4455　青山同窓会
第四銀行学校町支店口座　0275210　青山同窓会）

18回
玉木　繁治
21回
吉田武四郎
26回
木村　耐七
27回
斎藤　澄丸
田中　市助
28回
大谷　鐘吾
小原武一郎
野村治三郎
松浦　茂路
村田　凡愛
広橋　敏
29回
石崎　重郎
北村　太市
太田　久雄
武藤　経世
松井　達夫
田村文三郎
30回
上原　勝次
遠藤　種雄
山添　直
鷲田　徳雄
31回
浅海　勝次
田村　一也
松井　道夫
村田　忠夫
山下　大蔵
渡辺　政吉
32回
大塚　為吉
木村　義也
北村　博繁
久我　徳元
桑原　靖雄
小林　力三
斎藤　凱雄
霜鳥　重策
菅原　憲雄
竹林　松二
中原彦之丞
33回
磯野　英雄
磯部　佐吉
川上　英三
木村　守
佐々木　勧
春木　吾郎
平石　恒夫
高橋　又治
星　順司
堀川　秀一
松浦　錦一
山添　三郎
山田平五郎
山田　又一
若林　清
34回
石黒　一郎
内川　静作
今井　一雄
小野塚忠義
大西　正三
柏森忠四郎
神田　坤六
北村　秀以
木村　元
坂井　義雄
佐久間信吉
相馬　貞蔵
田辺　隆一
富川　潤一
塚田　大願
堀　保利
堀　吉蔵
宗像　達雄
山本　剛男
渡辺　芳雄
後藤　寿征
斎藤　申吾
佐野　清
竹内　仁幸
武田　量専
35回
五十嵐久四郎
今成　一郎
内田　善衛
尾崎　三雄
籠島　秀雄
小出　藤吉
近藤　百之
桜井　貞一
斎藤　昌治
沢山　巌
相馬　雄三
武田慎三郎
寺田　利男
丹路　信男
古川喜久次
丸山　求蔵
山名　栄一
36回
阿部　一蔵
石橋　健男
池　政栄
今井　二雄
植木　正平
植木　市松
小川種太郎
加賀田二四夫
風間　忠雄
金井　宣夫
河辺　昌伍
久保　文苗
倉田　享
斎藤吉之介
斎藤英四郎
関根　達夫
関根　勤
高木　利夫
田崎　元六
田中清太郎
寺井　元一
富所太三郎
中山　義男
樋口　均
福田　謙也
前田　節雄
丸岡　寛
宮島美代吉
村山　信雄
37回
安部　広雄
浅井　宏
猪坂　三郎
小野里寿夫
會　純道
黒川武三郎
小林　正二
鈴木　正二
田中　郁郎
田中　正二
田巻　恒彦
高橋　睦治
富永　良一
野末　武夫
馬場幸一郎
藤井　泰夫
原　林
三間　裕
武藤　惇
38回
石黒　得一
池田　正昭
太田　武
大沼　正一
桶谷　勇策
後藤　林八
加藤　秀英
勝田　虎夫
清野　準一
小林　三郎
近藤　圓
笹川仁一郎
沢野　十蔵
重野　仔
関屋　俊彦
田中　松一
竹石　三男
高野　政夫
高橋　朋幸
田村　勇作
中村　実
藤宮　武
舟崎　徹
丸山　岩三
皆川　忠郎
山田五郎久長
山田　重平
吉田　昭平
吉田　正男
渡辺　義平
藤田義一郎
高橋　隆甫
橋本　太助
木村　基
加藤　録郎
高橋　裕司
南　勇
南場　闊
39回
安部　助哉
伊藤　百里
市嶋智三郎
石高　信司
猪　初男
上原　虎雄
大野　恵司
小武内尚三
川崎　孝治
鎌田　輝虎
北川　立夫
小林　芳輔
佐藤　裕雄
佐藤　平八
志賀締二郎
関根　進
田中　正一
高橋　栄一
中村　健
福山　健
枡山　延次
松川　男児
皆川登良夫
皆川竹次郎
村田　篤
下　雅夫
大野　賢二
立間　実
新田　義正
吉田　文有
五十嵐健治
鷲沢　五郎
江口　泰弥
杉崎　晋
本田　正三
富村　定男
小林清市郎
40回
浅妻　直末
阿部　富衛
安倍　大裕
池田　政男
井村　繁樹
小沢　太郎
小柳　殻
熊倉　武夫
倉田　浩吉
小島　松一
小山　賢市
後藤　功
白勢　敬二
渋川　七夫
高田　信川
田宮弥一郎
竹中　忠司
竹林正五郎
池主　憲
土屋　均
南学　正時
長谷川卓三
早川　悦司
平田　甚
古山　淳三
松田　一郎
渡辺　信雄
湯浅　市作
吉井　典
吉岡　武憲
河内　恭三
中村　年夫
斎藤　久
山田金次郎
樋之浦　聖
41回
今川　正男
今成　隼次
金子　清
神田　明
木村　新
坂井　寿夫
佐藤家之助
志賀　潔
高橋　英雄
高橋　正道
高橋　正蔵
高野　秀夫
富沢　五郎
永井　昇平
中村　昌利
丹羽　正樹
野末　正二
布施　栄信
本間　敏雄
真島繹四郎
宮島　磊次
山谷　修一
山岸小五郎
柳本　実
八木　勝
渡辺　忠雄
渡辺　卓三
上原喜八郎
鎌原　保之
安達　敬吾
渡辺　博
清水　正一
星名　孝平
高田　弥彦
洪野　玄彰
丹呉　英二
42回
相沢　康平
阿部　辰一
有田　賢一
飯田　利男
今井　包和
石本　洪規
薄田　開元
大野総一郎
大谷　修三
大岡　書一
岡富之助
金沢　裕
菊地　勲
神林駒年
鋤柄　実
北村惣一郎
小泉　俊平
斎藤万亀男
佐藤　勇
高野　登
高橋　吉郎
高山雄次郎
堤　清作
鳥羽　正隆
豊岡　憲夫
西山　秀夫
樋口　正
広沢　斉
星野　裕
前田　隆英
丸山　平次
三国文治郎
石井　嵩
桑原　孝志
片山　彦
廣川　治
長谷川瀬清
田中　正吾
森山　敏雄
塩谷　正雄
43回
市橋　敏雄
今井　亮
小野寺　稔
小沢　省三
大内吉郎平
加賀田達二
加藤　行輝
鍵富　馨
菊池　芳郎
菊池　快神
草野　磐
佐久間正平
笹川　謙録
佐藤　彰平
佐藤　繁
佐藤　和吉
佐藤貞之助
佐野　真一
沢田　昴
竹石　真久
竹林　松雄
高木　喜三
田中　功
田中　一郎
田中　憲司
滝沢　義雄
徳重　茂
野沢　正男
早川　陽
浜田　昌栄
早船　春洋
本田　礼一
丸山　直威
渡部　一郎
山際　正雄
関能　克義
大野　南城
44回
伊藤　礼作
岩谷　丞一
遠藤　健一
小原　康作
垣原　高志
金子　一夫
加藤　斗南
北沢　裕
小池　寿哉
小林　広安
小泉　大三
小林　璋吾
斎藤　伸雄
佐々木勧麓
佐藤　敬雄
斎藤　三郎
田辺　啓三
寺田　由永
中村　健
七尾　健一
錦織登美夫
西　観司
西山　尚三
早川　広吉
平原　芳郎
広川勇一郎
平野　昇平
藤本　憲治
本田　一郎
村山　敏夫
山下　稔香
山根　俊英
山田　英政
山崎　関二
高野　伸三
今井　仁
相馬百合彦
45回
青木　基三
石崎　政治
石原八十秋
市嶋　正男
稲葉　敏郎
扇　嘉家
小野寺　豊
沖野　準
鹿取　邦男
柏崎賢太郎
河辺　邦昌
児玉　邦彦
小島　平弥
小林　直弥
佐藤　公夫
佐藤　俊健
酒井　敏行
清水　賢栄
志村　俊夫
渋谷　芳二
鈴木　俊夫
滝沢　久衛
田村　浩
高山　照三
高橋　光雄
高橋　敏雄
寺山　恒男
長島　信司
中山　仁
橋本　良材
長谷川　渙
長谷川健次郎
治　雅樹
本間　泰輔
丸山　泰雄
山際　昌介
錦井　兵衛
三宮　慶雄
棒　孝平
南　博
野瀬　秀雄
小林　朝男
橋爪　力
唐沢治一郎
五十嵐与四郎
稲村稲次郎
矢部　更
広瀬　敏
渡辺　節夫
金澤　武
藤島　俊
中村　国夫
品田　弘
46回
上杉　栄一
江口　松弘
大越健治郎
大津　任
小熊　幸男
加藤　国男
鍵富　春雄
片桐　英一
川上　慎三
君　正男
熊谷　大輔
工藤　常磨
栗原　道樹
小林　信夫
小山　崇燠
佐藤　正利
渋谷　平
下　勇
関　慧夫
高橋　敬夫
高島　達成
谷　欽成
高橋　是雄
塚野　敏郎
椿　一哉
富所　強郎
中田紳一惇
新田　公衛
馬場　吉衛
浜田　敏三
原　泰恭
伴　喜
樋浦　幸郎
広川　敏彦
広神　良貫
藤巻　雄
本田　富一
湊　栄夫
峯木　照二
横山　隆男
山田　市進
米原　一
佐野　英吾
堀　松義
川村　明昇
坂内　郎
稲野藤三夫
高橋　芳栄
村山　勝
47回
朝日　肇
池　重雄
伊藤　元司
内山　吉郎
岡村　茂
倉井　整
黒川　一男
剣持　栄一
斎藤　浩郎
斎藤暲太夫
清水雄善郎
巣山　二博
田中　夫
鳥居　俊保
中川　康
中川　敬秀
中村　正雄
中野　忠郎
西　芳博
広川　助
藤田三之男
水野　英吉
本間　日寛
森田　美次
山際　政成
山城　彬澄
渡辺　輝治
丸山　鋏康
灰野　秀彦
田村　輝
48回
天田　孝平
飯田　大透
五十嵐皓太
飯塚　正雄
大谷　一男
大橋　明自
小川　清常
大野　三樹
樫木　基
北村　英朗
倉島　亮一
小池　清泰
小出　昭
小林　好岳
近藤　源資
佐藤　素一
諏訪　宏
関口　太郎
田中　利男
高松　利男
土田　節也
銅治　倫
戸川喜代一
東城　次郎
内藤　啓一
中村　英治
林　俊太郎
森　慶治
野崎　亀六
長谷川健彦
樋口　通
本間　五夫
水戸　正郎
南　緑八彰
望月　正
八木　猛
山田　素夫
山口　修
山崎　宏英
吉沢　一夫
川村　健蔵
林　正太郎
伊藤　三努
広瀬　吉
吉川
49回
相沢　春吉
赤松　元敏
井上　正
稲泉　武男
江間正二郎
内田　文雄
小田　登
尾崎　富衛
梶原　計佐
梶山　勝清
木村　竜一
工藤　弘安
倉田　資孝
貝定　民雄
小林　幸男
駒林　行弘
佐藤　博
斎藤俊八郎
斎藤　敬治
清水　直彦
渋谷　直城
志智　勇
白川　保
仁保　武人
田中　久盛
田沢　和内
滝沢　信義
池主　子淳
長沼甲広男
中村　一徳
永松　久
原　俊猛
羽田　博夫
弘中　芳元
藤田　憲郎
堀内　正政
本田　胤
柳生　松茂
山崎　清武
渡部　猛生
渡辺　真純
阿部　義雄
逢坂　男
池田　順吾
小黒　勝一
小島　宏忱
乙川　一二
片桐　武司
角屋　法元
亀山　喜平
佐藤清　郎
佐藤　正雄
坂井　康男
紫竹　秀一
塩田　幸量
水本　弥
関井　昇雄
高島　幸雄
高橋　五一
竹内　八健
高山　耕一
土谷　貞治
中村　代郎
庭山清十爾
細野　介
丸田　世
南木三　久
宗村　三
山口
50回
池田　成徳
池田　信彦
五十嵐真夫
今井勝十弘
今井　信郎
岩沢　夫
上原　正勉
海老名道夫
枝村　正平
大石　信
大田　務
勝見　匡
上村　一郎
苅部洋太郎
木下広左右
轡田　勝弥
小林　淳郎
坂上　六城
[illegible]口　忠武
渋谷　郎
白井　悦誠
瀬谷　弥
大黒　善行
高橋　忠清
高橋　雄
竹之内達雄
田辺　尚夫
寺田　秀郎
中村　一宏
中村　亮一
根元　洋正
橋本　三
長谷川陽作
長谷川健雄
原田　敏一
馬場　賢尚
平石　良
藤井　義明
布施　栄聰
古川　誠
堀　信夫
真柄　三懋
前川　郎
三浦　五新
宮島　一
諸橋　謙郎
水野　哲明
山川　久治
山田　璋郎
山岸　芳績
吉沢　郎
吉村　武雄
岩瀬　勇清
五十嵐　浩
石崎　政榮
犬井　守博
木宮　剛計
小林　忠一
佐藤　勇夫
竹田　晴修
高橋　明司
時田　幹信
中村　次忠
西村　郎
馬場　春郎
廣川　一実
広川　生
本間　英一
宮崎　恒男
武藤　一
村山　世
山田　男
山本
51回
青木　博夫
荒井　奥弘
稲川　豊
岩城　剛一
池田　正司
五十嵐健之輔
歌川　正博
永木　昭治
大川　宏
大関昭雄策
小黒　六郎
落合　耕毅
岡本　治
笠井　幸謙
鹿島　仰治
笠原　二
勝山　新爾
唐沢　浅治
河内研太郎
川瀬　熙
北村　茂
小林　欣一
小林　孝二
小林　慎治
小宮　富郎
近藤上俊之
近野　啓
笹川　重男
嶋岡　強
菅野　恵浩
巣山　義人
高橋　泰和
田中　政雄
竹島　泰朗
中川　忠吉
浜田　新雄
西脇　繁一
細貝　一男
藤井　郎
藤田　三寛
真壁　一男
三村勇三郎
村山　安郎
村山　和仁
百川精一雄
山田小信郎
浅見　四夫
安達　輝郎
和泉　雄
市村　笑堯
今泉　誠顔
池田　昭吾
上原　友彦
内山　謙和
小柳　映三
大滝　安夫
岡村　昭雄
加藤　一
木下　栄進
持　正司
斉川　篤三
白石　誠郎
金木　康二
鈴切　成雄
高橋　敏一
田中　秀朗
田中　清夫
坪井富美秀
羽島　武雄
藤島　量雄
真野　幹次
丸山　男
丸山　芳猛
宮島　正郎
武藤　敏雄
室矢野十恒夫
八木　四夫
山下　義男
横木　男
52回
青山　秀
阿部　秋由
安東　道夫
稲村　秀元
石崎　昭一
小沢　興栄
奥山　実
折戸　睦男
押木　太郎
河端　昭二
河合　賢吉
木原　一陽
菊地　郎
斎藤　五兌
斎藤　和郎
坂井　陽夫
佐藤　昭二
佐藤　隆三
佐藤　秀三
沢田　義夫
塩田　欣郎
椎谷　正弥
白井　堅男
鈴木　雄
関口　次昭
武笠　昭郎
田中　序二
田中　昭雄
筑波　長治
冨取　竜助
長尾　徳二
中川　夫
永井　義明
永井　勝郎
長沢　淳郎
成田　昭一
丹羽　昭二
野崎　一
橋本　一昭
早川　義郎
広川　之行
広田　助
藤田　昭勲
本間　礼二
本尾　一
宮川　昭等
皆尾　益三
宮島　洋昭
村川　益作
村　克
森田　二滋
森崎　重郎
山木　利郎
湯田　兵哉
吉　二衛
渡辺　郎
渡辺　千赳
阿部　春
岡崎　次亘
小熊　昭夫
小黒　鐵児
北嶋　和也
倉井　益隆
小林　英二
坂井　世
佐藤　保仁
亘　太也
花井　吉
古川　省隆
本間　幸次
真保　英夫
山川　禎治
吉田　能二
53回
阿部　定一
伊藤　成
石黒　達也
一柳　邦男
石沢　嘉彦
今立　作元
稲月　之助
大倉　憲吾
大谷　邦夫
片桐　憲吾
河合　忠衛
川口　信夫
神林　輝弘
久代　和夫
栗原　稔
小島　久雄
小林　辰雄
小林　茂孝
小林　武
近　昭泰男
坂井　武夫
桜井　惣智
佐藤　太郎
笹川　徳義
笹川　之助
篠原　長一
白井　弘勇
鈴木将隆造
関　二郎
玉木　二郎
高崎義国夫
高木　秀夫
長松　和丸
西山　一郎
橋　道夫
広山　敏雄
広本　一弥
藤沢　功
福川　秀勇
前田　昭夫
前原　治平
前川　敏一
本間　昭雄
桝潟　隆夫
増山　伸司
松本　一
正木　典宏
山田　義豊
若沢　夫
渡辺　典隆
浅海　良典
荒木　雄
伊藤　純男
石腹　昭孝
板津　五堯
上杉　光一
内山　昌三
植村　郎
川村　松男
小黒　良夫
栗原　昭
小林　道郎
佐藤　辰策
沢村　芳雅
白井　興夫
白川　俊男
塩谷　太男
渋谷　鴻司
鈴木源良英
丹後　英郎
高田　一
高橋　典治
高橋　一
津野　利努
中村　三雄
長場　英雅
平木　嶺弘
櫛谷　郎
藤田　和治
藤島　利樹
藤巻　一昭
福原　矩夫
福島　右栄
坪川左勝郎
本間　又雄
間瀬　司
密本　一
山田　典
54・55回
阿尻　威吾
浅妻　昭三
今湊　良敬三
石本　林智郎
今井　兼一郎
梅沢竹太昭
大島　壮保
片岡啓　彦
片桐　武紀
児玉　一
小林　一彦
佐藤　正登
斎藤　健夫
斎　雅一
渋木　慧
下条　杜一
庄司　元晃
真谷　誠吉
進藤　仁卓
砂山　真
清野　半男
早福　禅
高井　民剛
津野　達夫
土田　男
常木　哲哉
寺崎　寿人
冨所　誠彦
野崎　直春
長谷川政栄
長谷川正雄
星井　助一
細野　利雄
前田　輝男
武藤　徳夫
松浦　一二
三村　義平
村山　賢行
山崎　甚二
山田　源彦
山田　賢雄
吉原　俊一
米山　迪夫
和田　昭修
磯部　大義
石橋　弘
梅沢　一次
小松　磨
高橋　信二
高橋　昌興
中山　顕明
平山　保
保倉　直
鷲頭
56・57回
阿部　弘昭
綱干　道雄
有磯　邦男
池田　兆策
石田　恒良
市川　千尋
市川　久純
岩倉　徹
岩瀬　玲二
今城　信敬
上田　宏
浦野　衛
逢坂　説郎
大谷　七己
大湊　勝郎
岡　一三
折戸　淳衛
加藤　善則
加藤　勝策
織田　吉谷
小田　瑞彦
笠原健一郎
籠島　一衛
木村　直平
久保田剛敏
栗林　昭
小島　芳郎
佐藤　豊
鈴木　寧
高塚　勝吉
南雲　照三
並川　健介
中山　昭一
庭山　六郎
伴　昭彦
広川　宏
星野　健二
三崎　正一
目黒　剛
渡辺　友也
渡辺　康司
赤坂　長弥
朝比名和三
荒川　昭寿
遠藤　芳幸
大竹多計二郎
大川　進
小野塚利彰
大野　幸夫
川田晴四生
北村　周郎
倉茂　秩明
小嶋　重夫
小松　晃男
佐藤　守威
佐藤　悦
清水　正隆
鈴木　身
田中　孝
中村　義晃
中川　正彰
西　英明
柏川　之
野沢　英雄
早川　克潔
原　英二
福田　克彦
丸山昭三郎
松井　昭昌
三上　明
間野　昭行
山中　紀正
山本　幸一
渡辺　義茂
畠山　雄
石崎　和
58回
青柳　広士
歌代　荘平
遠藤　整治
小熊　勇司
五十嵐　治
大山　芳郎
加藤　高弘
木村　善章
近　寅彦
駒形　勇松
坂井　熙一
佐藤　明夫
佐藤　俊彦
斎藤　俊一
篠田良一郎
曽我　浩
高橋　昭吾
高橋　洋児
種村　祥一
早川　哲夫
平山　詩郷
福島　惣吉
福田　満
藤崎　俊茂
掘内　幸夫
宮川　祥司
松浦　近夫
宮崎　昇励
室谷　平
矢野　教
行田　成宏
阿部　昭隆
池田　照義
石塚　耕五
遠藤　忠雄
岡田　政衛
笠原　栄克
川口　七行
金沢　信二
加藤　一尾
近藤　夫
小林　一男
斉藤　茂
斉藤　三夫
茂田井龍昇
高橋　啓男
高田　勝介
大門　克治
永井　雄
永井　良孝
八子　忠
早澤　俊雄
藤村　新洋
本間　祐行
掘　二
本永　哲嗣
宮澤　皓昭
森岡　信朗
山谷　芳榮
横山　豊弘
渡辺　司
渡部　悦
59回
旭　裕善
安倍　邦造

飯塚 実
五十嵐 哲夫
飯村 康一
伊佐 修
市川 鉄夫
宇佐美裕三
牛木素吉郎
江口 昌男
大石 正夫
大川 健
岡田 久
奥村 繁樹
笠井 駿
金巻 久
神田 悌三
川上 忠男
木村 明
菊地 晴彦
倉品 克明
小島 道夫
小松原金二
河野 誠
笹川 一雄
佐藤 純一
渋木 幸三
茂泉 喜彦
重野 行甫
島崎 毅
白井 三男
鈴木 誠一
関根 彰圓
高橋 勇蔵
高橋 剛一
高橋 陽一
高山昇二郎
竹山 諒一
種岡 健
花井 進
中野 文郎
西野 武
畠中 康勝
早山 之
中野 誠
樋口 卓
広川 均
広野 樹
藤由 学
藤原 幸雄
掘川 兵一
松本 俊彦
山崎徳佐エ門
山宮 英世
山田 一介
吉川 篤
渡辺 幸雄
渡辺 満
安食 裕夫
相川 義信
池田 正文
泉田 亮助
川上昭八郎
加藤 新策
唐津 和雄
栗林 重夫
栗林 貞夫
小林 栄作
小林 圭次
小林 謙二
小城 一廣
新川 滋
関根 享
園城 英二
高見 廣治
高見 忠
髙櫛 正利
塚田 俊夫
中村 彰
南波 弘
野口 国典
長谷川和夫
藤巻 国栄
櫛谷 全一
牧 泰彦
三崎 良次
水沢 邦弘
諸橋 丈夫
山吉 一成
渡辺 初男

60回

五十嵐邦一
五十嵐健一
池浦 厚司
石井紀一郎
今井 一雄
市川 豊
市村 檀
泉 精司
上杉 雅之
内山 真一
奥田 達也
落合 夏樹
大田 英男
岡村 嘉志
加賀田 実
片岡 真
金山 常吉
櫛谷不二男
熊倉 登
熊谷 忍
熊倉 正司
熊田 彰
小石 光夫
小出 直
小林 亨
小林庄一郎
小林進一郎
小林 智明
小山 功
小林 賢一
坂井 丈夫
斎藤 卓史
佐々木 誠
清水 悌作
杉山 一教
高橋 正樹
田中 民也
高橋 英雄
高野 信之
玉木 文夫
富田 悦治
田部 幸夫
西脇 満
橋本 行雄
広瀬欽次郎
泰 篤夫
平田 大六
福田 博
星野 昇
星野 昭夫
本間 一浩
松井 幸彦
山崎 良一

山崎 達男
渡辺 晃二
渡辺 修
吉田 栄男
石黒 忠士
大井 忠夫
甲斐佐智男
金塚 尚
佐藤 孝
高橋 貞夫
高橋 明男
高橋 進
田中 浩一
田村 和郎
高野 昌三
豊岡 隆
戸川 正弘
富山 佑男
富山 和夫
徳田 浩一
長橋 洸
中村 信夫
中山 弘
早武 正博
長谷川秀三
濱田 達三
藤本 剛
藤田 吉次
水野 哲雄
宗村 健吾
矢川 和偉
山崎 健
山田 宏
山本 淳夫
渡辺 正雄

61回

阿部徳次郎
赤堀 和郎
浅間 道子
石見 達夫
石井 壮一
石井 淳
伊藤 良介
居城 慶一
江口 良助
江村 隆三
太田 賢輔
大矢 英一
大塚 為和
加藤 栄一
片桐 信康
川崎 栄一
木村 磐
岸田 哲男
北村富士男
小杉 秀一
小出 広記
小池 弘
近藤 英雄
斎藤 義明
佐々木 繁
佐藤 真武
三条 和夫
塩谷 明
清水 淳栄
柴野 良一
菅原 和明
鈴木 正三
関根 理
富川 龍之
竹山 恒夫
高桑 暁
長沼 雄峰
西野 誠
庭山 熙彦
野本 昭生
長谷川義明
藤井 真夫
藤崎 隆三
本間 淑人
松尾 彰
宮川 隆
山本 勲
結城 隆一
横村 一郎
若林 瑞穂
浅見 昭史
阿部 亜生
安藤 友憲
安宅 久憲
石山 謹治
今井 晃
大倉 茂男
大谷 寛
大野 恭信
金子 章
河辺 明彦
木村 政雄
木村 昇
木田満洲男
熊谷 隆幸
小林 貞夫
滝沢 哲也
高橋 龍威
田中 宣
土田 常武
南波 哲治
浜口 福壽
本田 順治
村山 健
谷田部信
矢山 昌二

62回

安食 恒昭
荒木 貞至
池田 昌之
石田 寛
石黒 恒
石崎 敬
岩田 忠郎
上瀬 正樹
漆原 明
遠藤 介二
加藤 一
小黒 美男
神坂 昌亮
貝津 粛治
木村 徳開
小池 郎
河野 健弘
近藤 郎
小林 哲彦
斎藤 政司
佐藤 文志
佐藤 勝也
重野 武也
坂井 誠男
杉田 直愛
内子 幸元

田村 誠一
田村 恭子
高橋貫次郎
滝沢 健一
立川寿美子
中川 国臣
中村 洋吉
西野 二郎
長谷川 勲
長谷川 慷
原 舜治
原 滋郎
平田 正雄
藤山 邦夫
星野 陽二
堀 仁
堀口 栄一
本多 忠五
町田 京子
丸田 仁
三国 有吉
三浦 龍彦
三崎 愛三
守口 成夫
渡辺 隆夫
村木 順司
結城 修
渡辺 俊郎
渡辺 哲也
山崎 真
石見 勝務
石崎富士子
市川 秀臣
内山 隆実
大高 康之
貝沼 由夫
角家 孝紀
近藤賢琢之
笹川 也
佐藤 政介
鈴木 怜
鈴木 夫
曽我 良勉
田中 健
外山 敏三
中山 忠啓
中村 彦
中島 彦
永井 寛
早川 梓
福田 生彰
藤巻 圭一
帆苅 宏介
皆川 典
湊 一重
妙円蘭 子
村山 悦章
丸田 康朗
桝山 雄
宮沢 敏純
山川 廣夫
渡部 正之義

63回

阿部 達
赤羽 良樹
池 治男
和泉 修治
伊藤 寿介
伊南 純雄
居城 正二
江口 律子
大坂 敏
大坂 伝衛
大谷 道男
小畑 忠夫
栗田 雄三
小林 光衛
小林 洋一
斎藤 勝一
白倉 至
相墨 直彦
高木 章介
滝沢 一彦
滝沢 正元
竹山 行三
土屋 信之
千種 富生
寺島 雅範
戸井田 一美
中村 瑛
福住 一
藤井 欣治
真山 尚俊
水落 樹
村山 義義
山田 弘一
横田 恵昭
渡辺 美夫
和田 昌男
相馬 和潔
赤澤 彦
石川 満吾
池 庄行
五十嵐成子
五十嵐信房
薄田 一郎
小川 聴
加野 正孝
片桐 英資
北村 重雄
小林 寿一
小川 章宮
笠原 俊雄
斉藤満 恵
坂井 寿子
桜井 権
白勢 競
高橋 謙三
高橋 正人
梶原 知義
長津 哲郎
西名 佐子
西村 英輔
羽入 正儀
早川 義郎
馬場 勉
平原 政説
藤井 正男
本田 洋
松本 二
松岡 良一
緑井 欣子
望川 京一
山月 光一
山崎 晃一
湯本 賢昭
油本 忠一
吉浅 潤司
一本 弘平
一田 暢勇
圭介

64回

田代 壮
田村 治朗
田巻 康一
坪井 亮
栃倉 正康
早川 周巌
藤沢 靖作
星山 勇郎
松永 邦二
森田 一夫
和田 弘郎
路谷 憲治

65回

阿部 正志
安食 悟躬
荒川 哲朗
池 隆夫
伊藤 忠史
岩野 一明
宇佐美 快郎
小沢 征昭
尾関 通夫
小栗 政郎
大崎 一夫
大堀 隆治
尾崎 夫
大橋 修元
笠原 成一
加藤 純美
金巻啓 司郎
河路 明夫
近藤 昭雄
近藤 良雄
白井 三雄
斎藤 彰
佐藤 孝
佐藤 勝弘
鈴木 達昭
三林 輝夫
三林美 奈子
早福 澄子
寺崎 武徳
野崎 睦美
伏見 勝也
本間 英男
松木美 智子
丸山 一敏
水野 左敏
宮川 忠和
山田誠 之輔
吉井 士郎
吉田 穂積
阿部 久子
浅田 和之
泉 達尚
池 浩
飯野 勝栄
高橋 健二
風間 美爾
川合 英次
久保田 泰雄
小林 茂
佐藤 貞夫
棒 幹郎
鈴木 恒
曽雅 義彦
高橋 貞夫
野口 裕
羽田 俊六
村山黄 三郎
吉田 治彦

66回

池田 葵
池 政男
行形 和也
居城 三郎
榎並 義允
小川 博史
小川 亮一

一次 夫
一子 晃
一郎 徹
英慶 郎
海公 勝
正寿 脩
士 弥
伊藤 市
池浦 彦
石崎 敬
内海 士
大石 一
小田嶋 司
風間 治
川口 朗
北村 喬
熊谷 常弘
小林 清久
小林 幸実
近藤 人
斉藤 男
坂井 清之
佐川 陽弘
佐藤 唯彦
佐藤 幸之
佐藤 史満
柴田 晃
鈴木 睦章
高木 夫
谷 通
立川 久祐
千原 昭之
忠 利司
土屋 司
中林 暢巳
庭山 祐通
広川 巳
星 郎
星 男
本間 義明
松原 迪廣
森 浩茂
吉田 豊夫
山根 伸雄
山崎 雅清
渡辺 雄
阿部 欣文
青木 昌三
青木 信章
石井 正司
牛木容 孝子
大倉 司
川崎 男
篭島 生
柄沢 佳夫
堺 信幸
近 郎
木山 光朗
桑野 光一
桑山 正亮
佐藤 康
佐藤 巌
佐藤 茂作
清水 裕郎
新谷 昂二
清水 良夫
鈴木 厚郎
高橋 敏治
高橋 正志
田中 一
田代 堅 治
田村 壮 康

加藤 孝二
加藤 靖夫
風間 聰一
加藤 勝弘
金子 謙三
合田 春美
熊谷 国男
小林 啓志
小林 裕子
桜井 晃
鈴木 興春
田中 澄夫
高島 文治
高島 敬子
寺島 邦雄
中谷藤 太郎
長谷川 精一
橋本 誠
山口 喜靖
山崎 稔
渡辺 正弘
渡辺 喜光
吉田六左エ門
横瀬 功
今井 正雄
小木 順一郎
下川 友也
菅原 均
関根 敏雄
高橋 守
丹羽 真彦
野水 宏樹
本間 請子
二宮 靖彦
矢部 直子

67回

石井 俊
石田 瑞穂
井上 一郎
今泉 信作
大高 道夫
大滝 正通
小川 宏
小川 トモエ
岡崎 功
川崎 昌彦
岸田 興治
君 英夫
小林 晋一
佐川 八重子
斎藤久 美子
沢田 俊一
関根 昭一
高倉 亨
田中 直史
戸松 秀雄
仲村 真
中野 仁
永井 健司
広野 達彦
星 充
松井 健吾
丸山真 三男
松川哲 之助
右田 史朗
三堀 浩
渡部 透
池 隆夫
小野 勝義
奥村 紀男
笠原 敦子
北村 紘一
佐々木 邦夫
久雅 直温
桑山 哲治
白井 節
塩原 満
清水 雄伍
瀬下 一三
田中 収
高野 宏一
滝沢 元
寺井 宏
永井 穂
原 一敬 治

68回

赤塚 二
岩原 爾一
上村 作
北村 十郎
駒林 修和
今野進 晃子
進藤喜 泰雄
斎藤 四敏
関野 公果
斎藤 代一
田中 忠弥
田中 夫
池主 正
土田 康正
宮尾 光征
西原 憲徹
安達子 益司
安孫 治
阿部 賢明
石黒 晋子
上村 俊子
上村 正幸
小田 嶺介
小川 敦モ
加藤 公洋
笠原 克治
川崎 ト雄
風間 紘幸
木伏 建久
近藤 孝雄
近藤 靖勲
小林 和二
佐藤 義則
佐藤 泰子
渋谷 広也
鈴木 暁博
須磨 喜二
関 美男
関川 隆臣
田中 利爾
竹石 世郎
竹石 銀大
堤 次雄
寺尾 正男
中島 輝司
西田 和吉
浜田 庄子
樋口 修二
福田 良彦
藤田 伸生
藤崎 昌敬
古館 信孝
星野 弘
堀川 健
丸山
梁取

横山 清夫
渡辺 待子

69回

石本 隆太郎
今井 ゆ昭雄
大森 かり
小島 健二
小町 聰敏
小林 勲
佐藤 要輔
敦井 栄一
寺尾 芳樹
栃倉 浩
中原 恭子
広瀬 淳之
本間 譲
吉津 孝衛
若松 謙一
阿部 治男
青木 利祐
伊藤 陽
池田 正夫
石川 健一
飯島 信輔
大川昭 一郎
小川 敏子
岡田 尚子
笠原 弘
斉藤 栄次
里村 国雄
渋谷 友康
新田 澄夫
菅沼 公子
菅井 幹浩
高柳 洋夫
塚原 秀夫
富所 忠規
堂垣内 男
長浜 勝亨
平林 功介
藤田 淡三
山下 菊水
山崎 高夫
吉田 建明
渡辺 国男
国正

70回

和泉 蓉右子
猪口 孝
小川 瑞枝
小沢 欣治
伊藤 善允
大塚 哲夫
岡田 利邦
加藤 清策
加藤 邦紘
金子 健三
笠原 大仙
川田 昌人
桑原 和雄
佐川 幹恵
小林 紀昭
坂井 政行
斎藤 弘道
志賀 安雄
清水 伴雄
田中 信
田中 由夫
高辺 豊
内尾 英明
新藤 栄樹
野田 誠一
能川 晃一
花田 直子
平輪 治
藤林 和郎
伏見 誠
松原 省三
増田 紘
三国 勝弥
右田 政勝
水上 洋
山口 和雄
山田 セツ
横山 修
渡辺 治夫
網代 介
浅川 灌耿
青山 正洋
今井 一
岩脇 捷
石原 秀昭
伊藤 俊廸
魚谷 賢夫
蝦名 司
小川 克茜
小山 弘彦
簡井 正良
笠原 英一
近藤 哉
小松 光尚
小泉 修男
酒井 和平
佐久間 代
斉藤 ゆき子
斉藤 健久
札木 俊統
柴田 忠輔
鈴木 明
関根 臣
高野 俊攻
高橋 明
高橋 道樹
戸田 達子
西野 泰三
樋木 礼宏
平山 子
日江井 宣信
藤井 賢子
星 敦一
本間 保子
本田 雅男
水野 重啓
村松 正紀
村山 邦樹
山田 信生
吉川 祥輔
鷲頭 正誠
渡辺 代子
渡辺佐 宏孝
渡辺美 那子
二担
允美
雄

71回

秋浜 知子
阿部 尚平
植木 岩根
小林 碧
菅井 正
中野 久

中村 英一
丸山 鉄彦
野沢 正樹
村山下 克夫
山田 進
相藤 康夫
伊井 邦彦
今沢 清治
小島 和子
鴻沢 剛
柄保田 卓子
久林 明美
小藤 正彬
佐川 利
関橋 正き
高村健 あ郎
中村 三男
西谷川 俊子
長田 朝一
本坂 誠輝
槇原 正一
松内 要夫
山本 幹介
若林 俊忠

72回

今井美 和子
内山 正義
栗原 一親
祖父江 邦子
立川 克雄
丹羽 正之
松原 和子
阿部 武
青木勝 代志
荒井 龍二
石井 達夫
石山 貞継
梅田 典夫
栄木 慶次
大野 義彦
大野 勝
太刀川 圭一
神林 賢治
桂 八重
北村 誠作
黒木ト シ子
熊谷 忠二
小林 脩
後藤 隆夫
後藤 達男
斉藤 俊正
佐野 正俊
志賀田 紀子
清水 陽人
菅又 滋
高橋 章
高野 理子
田中 道子
冨田 由李
中戸 義興
内藤 豊明
成沢 栄一
成山 美子
古岡 恒夫
船谷 信雄
細内 長貞
堀川 幸夫
掘間 康雄
本野 政春
牧永 秀雄
松田 宏五
松国 一義
三崎 正昭
山澤 麗子
吉井 篤子
和久井 和彦
渡辺 一重
渡辺 正敏

73回

阿部 達也
阿部 裕
石田 有史
鈴木 淳
小川 幹夫
斎藤 昭治
鈴木 淳
関野 弘賢
中村 孝之
高崎 進
鶴木 秀司
関野 弘賢
中原 和之
中野 治
長谷川 満男
樋口 正昭
平野 宏
石田 レイ子
大野 裕
田島 健二
田中 光二
広瀬 修平

74回

相場 文夫
和泉 潤
古賀 良生
志田 常弘
鈴木 勝紀
関 憲一郎
田中 秀明
高橋 秀憲
中村 義一
藤田 之巳
吉川誠 陽助
石本 祥子
蔦田 子
大森 秀寛
大橋 雄
大滝 均
糟谷 好邦
賀谷 正
加門 文隆
金井 隆夫
久保 克巳
黒井 健
小賀坂由美子
権平 弘
笹川 雅之
笹川 秀男
佐藤 芳夫
鈴木 芳造
塚野 憲一
冨澤 慶栄
戸枝 一明
永井 明彦
西田百 合子
番場 清
広瀬 秀
広野 光子
広神 俊彦
坪川 藤夫
古川 兵衛

本間 裕

75回

勝又 宣夫
川上 滋
坂井 啓二
佐藤 静一
渋谷 伸一
塚本 修
福田 実
掘 一
渡辺 研二
味方耕 一郎
石塚 文雄
石塚 英男
石田 彰
石原 法子
伊藤 哲夫
伊藤 隆
伊藤 啓司
枝並 一夫
大坂 菊男
大野 敏雄
大塚 恵子
大野 道子
小原 一政
大越 公平
尾形 幸生
大井 裕
神林ア ヤ子
加藤 博
小島富 美子
後藤 輝雄
斉藤み さ子
斉藤 昭雄
佐藤 啓介
佐々木 珠夫
佐野 康子
佐野 幹雄
坂元 正広
清水 純
清水 義晴
鈴木 広志
曽我 正男
田中壮 太郎
谷澤 隆邦
谷澤美 悦子
多賀 代蔵
高橋 正
高木 一宣
玉井 正光
玉木 廣
常山佐 世子
富樫 正子
富山 修一
永井 博子
長谷川 明久
萬歳 信行
馬場 俊博
星野 雅博
桧ヶ谷 正道
廣川 均
藤井 春恵
星野 朝子
三冨 修
皆川 信
室塚 泰二
武藤 芳郎
若月 雅美
山根 英郎
山内不 二夫
渡部 信子
渡辺 新
渡辺 秀雄
渡部 一俊

76回

石田 芳博
大井戸佐紀夫
大橋 誠吾
熊木 徳正
長北 学
牧野 昭次
吉岡 俊
木津 正新
渡辺 繁
伊奈 良重
小田 高久
大野 繁和
恩田 雅資
加野 裕子
金津 涼
柄沢 信一
久住 治
小島 隆平
斉藤 治
斉藤 実治
佐藤 哲博
鈴木 正謙
鈴木 徳
武田 英雄
高山 豊作
田村 俊子
櫛谷さ わ子
本間 村紀
安田 充年

77回

瀬賀 孝子
佐藤 茂
斉藤 繁夫
長谷川 次郎
内山 裕文
小川 芳広
風間 誠
佐藤 寿一
清野 慎栄
小林 悟
山田 恒樹

78回

加藤 章一郎
熊木 徳次郎
小林 敬直
笹川 孝子
谷沢 礼子
寺尾 英明
寺尾 綾
吉川 康三
相澤 裕吉
青木 孝一
坂井 彦
宇田 和子
遠藤 和男
小野 真知子
大久保 昌邦
金沢 宏
金沢 子
久世 泰雄
小林 隆人
佐藤 和子
高橋 照隆
滝沢 恒世
敦井 実
神保 昌幸
長谷川まこと

田 博子
本間 健治
向井美 夜子
村田 光男
和田美 津子
若林 孝
渡辺 茂

79回

赤野 正明
五十嵐 康之
川上 康夫
本間 義康
青山 義明
浅井 敬一
伊藤 敏
伊藤 毅
井上 隆二
遠藤 龍介
岡村 芳雄
小田 章治
大野 俊治
奥田 信良
小原 正男
川合 千尋
河 正子
後藤 丹
木村 公平
倉田 由美
久保田 愛子
斉藤 秀広
斉藤 良夫
斉藤 君子
佐藤 玲子
佐藤た つ明
佐藤 和夫
佐藤 俊一
白井 晃雄
進藤 行治
高坂 誠子
田坂 浩昭
田中 憲勝
田中 隆
田村 尚
豊島 宗厚
中川 徹
内藤 真一
野村 正史
長谷川 久雄
伴 至
平尾 俊彦
丸潟 孝
山崎 玲子
山田 節子
吉田 英幸
横川 民子
吉田 司

80回

扇 嘉明
池 淳一
太田 啓子
片山 修
斉藤 一恵
植木 邦彦
枡山 康二
山井 健介

81回

朝井 豊
砂田 徹也
坂田 光子
鷲沢 直也
武田 正之
長北 敏弥

82回

奥田 健
小林し お り
三條 俊彦
島倉 晶子
土田 利男
宮野 正美
小亦 斉

83回

玉木 槇一
浅間 芳朗
五十嵐 謙一
植木 秀功
岡田 潔
片岡 幹博
加藤 稔
川上 誠
近藤 周子
木村 豊
木下 康司
熊木み や子
高橋 克人
中戸 雅博
長沢 恵依子
仁多見 俊夫
根岸 秀行
古川 靖
宮野 由貴子
森平 淳子

84回

相田百 合子
朝倉 仁樹
岡田 憲明
小山 芳明
神蔵 宏
木村 正芳
笹川 藤昭
高橋 裕之
本田 竹彦
諸井 孝
村上 誠
山口 英俊

85回

笠原 徹
竹内 一彦
船浪 静弥
岩崎 龍一

86回

瀬谷 信一郎
庄司 明
加賀田 豊子

87回

清水 忠明
石川 裕之
永井 毅人

88回

吉田 英和
三木 公一

92回

河内 康志
上杉 雅史
早川 泰

99回

宇田 達

通信制
213名